

棺桶の花嫁

海野十三

青空文庫

春だつた。

花は爛漫らんまんと、梢に咲き乱れていた。

時が歩みを忘れてしまったような、遅い午後――

講堂の硝子窓のなかに、少女のまるい下げ髪頭が、ときどきあつちへ動き、こつちへ動きするのが見えた。

教員室から、若い杜もり先生が姿をあらわした。

コンクリートの通路のうえを、コツコツと靴音をひびかせなが

らポイと講堂の扉ドアをあけて、なかに這入はいっていった。

ガランとしたその大きな講堂のなか。

和服に ながばかま長袴 をつけた少女が八、九人、正面の高い壇を中心

にして、或る者は右手を高くあげ、或る者は胸に腕をくんで、群像のように立っていた——が、一せいに、扉のあいた入口の方へふりかえった。

「どう？ うまくなつたかい」

「いいえ、先生。とても駄目ですわ。——棺桶の蔽おおいをとるところで、すっかり力がぬけちまいますのよ」

「それは困ったネ。——いつそ誰か棺桶の中に入っているといいんだがネ……」

少女たちは開きかけた唇をグツと結んで、クリクリした眼で、たがいの顔を見合つた。あら、いやーだ。

「先生ツ——」

叫んだのは小山こやまミチミだ。杜はかねてその生徒にシヤイニング・ミミ眩しい乙女1という名を、ひそかにつけてあつた。

「なんだい、小山」

「先生、あたしが棺の中に入りますわ」

「ナニ君が……。それは——」

よした方がいい——と云おうとして杜はそれが多勢の生徒の前であることに気づき、出かかった言葉をグツとのどの奥に嚙のみこんだ。

「——じゃ、小山に入ってもらおうか」

英語劇「ジュリアス・シーザー」——それが近づく学芸会に、女学部三年が出すプログラムだった。杜先生は、この女学校に赴任して間もない若い理学士だったが、このクラスを受持として預けられたので、やむを得ずその演出にあたらねばならなかった。

はじめ女生徒たちは、こんな新米の、しかも理科の先生になんか監督されることをたいへん不平に思った。でも練習が始まってみると、さすがに猛たげき文学少女団も、ライオンの前の兎のようにおとなに温和おとなしくなってしまった。そのわけは、杜先生こそ、理学部出とはいうものの、学生時代には校内の演劇研究会や脚本朗読会のMEMBERとして活躍した人であったから、その素人ばなれのした

実力がものをいって、たちまち小生意気な生徒たちの口を黙らせてしまったのである。

空虚からの棺桶は、ローマの国会議事堂前へなぞらえた壇の下に、据すえられていたが、これはふたたび女生徒に担がれて講堂入口の方へ搬はこばれた。

この劇では、黒布くろぬので蔽われたシーザーの棺桶は、講堂の入口から、壇の下まで搬ばれる、そこにはアントニオ役の前田マサ子おおいが立っていて、そこで棺の蔽布おおいが除かれ、中からシーザーの死骸があらわれる、それを前にして有名なるアントニオの熱弁が始まるといふ順序になっていた。

ところが、そのアントニオは、空虚からの棺桶を前にしては、一向

力も感じも出てこないため、どうしても熱弁がふるえないという苦情を申立てた。――

講堂入口の、生徒用長椅子の並んだ蔭に、空虚の棺桶は下ろされ、黒い蔽布が取りさられた。

小山ミチミは、切れ長の眼を杜先生の方にチラリと動かした。いつものように先生はジツと彼女の方を見ていたので、彼女はあわてて、目を伏せた。そしてスリッパをぬぎ揃えると、白足袋をはいた片足をオズオズ棺のなかに入れた。

「どんな風にしますの。上向きに寝るんでしょ」

そういいながら、小山は長い二つの袂たもとを両手でかかえ、そして裾を気にしながら、棺のなかにながながと横になった。

「アラツ——」

ミチミの位置の取り方がわるかったので、彼女の頭は棺のふちにぶつかり、ゴトンと痛そうな音をたてた。

杜先生は前まえ屈かがみになつて素早くミチミの頭の下に手を入れた。

「……ああ起きあがらんでもいい。このまますこし身体を下の方に動かせばいいんだ。さ僕が身体を抱えてあげるから、君は身体に力を入れないで……ほら、いいかね」

杜先生は両手を小山の首の下と袴の下にさし入れ、彼女の身体を抱きあげた。

「ほう、君は案外重いネ。——力を入れちやいかんよ。僕の頸につかまるんだ。さあ一イ二の三ツと——。ううん」

ミチミは、顔を真赤にして、先生のいうとおりになっていた。

「ああ、——」

少女の身体がフワリと浮きあがったかと思うと、やつと三寸ほどもしも手の方へ動いた。

杜先生は少女の頭の下から腕をぬくと、その頭を静かに棺の中に入れてやった。彼女は鏗わるびれた様子もなく、ジツと眼をつぶっていた。花びらが落ちたような小さなふつくらとした朱唇しゆしんが、ビクビクと痙攣けいれんした。杜はあたりに憚はばかるような深い溜息を洩らし、腰をあげてことを忘れていた。しかし彼の眼が少女の緑茶色の袴の裾からはみだした白足袋をはいた透きとおるような柔かい形のいい脚に落ちたとき慌てて少女の袴の裾をソツと下に引張つ

てやった。そのとき彼は自分の手が明かにブルブルと慄ふるえているのに気がついた。

女生徒の或る者が主役の前田マサ子の横腹をドーンと肘ひじでついた。前田はクルリとその友達の方に向き直ると、いたずら小僧のように片っ方の目をパチパチとした。それはすぐ杜の目にとまった。——彼は棺の上に急いで黒い布を掛けると一同の方に手をあげ、

「さあ、ほかの人はみな、議事堂の前に並んでみて下さい」といって奥を指した。

女生徒たちは気味の悪い笑いをやめようともせず、杜先生のうしろから目白押しになって壇の方についていった。

杜先生は壇前に立ち、この劇においてローマ群衆はどういう仕草をしなければならぬかということにつき、いと熱心に説明をはじめた。それから練習が始まったが、女生徒たちは腕ののぼし方や、顔のあげ方について、いくどもいくども直された。

七、八分も過ぎて、ローマの群衆はようやく及第した。ちよつとでも杜先生に褒められると、少女たちはキキと小動物のように悦ぶのであった。

「では、さっきのアントニオの演説のところを繰返してみましよう。——みなさん、用意はいいですか、前田マサ子さんは壇上に立って下さい。それから四人の部下は、シーザーの棺をこつちへ搬んでくる。——」

練習劇がいよいよ始まった。杜先生はたいへん厳肅な顔つきで、棺桶係の生徒たちの方に手をあげた。

四人の女生徒は棺桶を担いで近づいた。しかし彼女たちは一向芝居に気ののらぬ様子で、なにか口早に囁きあいながらシーザーの棺を壇の方へ担いできた。先生の眼が、けわしく光った。

やがて棺は下におろされた。

アントニオが壇上で大きなジェスチュアをする。

「おお、ローマの市民たちよ！」

と、前田マサ子がここを見せどころと少女歌劇ばりの作り声を出す。

そこで棺の黒布がしずかに取りのぞかれる。……

——と、シーザーならぬ小山ミチミが棺の中に横たわっているのが見える——

という順序であつたが、棺の蔽いを取つてみると、意外にも棺の中は空っぽだつた。

「おお、これはどうしたツ」

「アラ小山さんが……」

一同は肝を潰^{つぶ}して、棺のまわりに駈^{かけ}よつた。

「……あのウ先生、棺をもちあげたとき、あたし変だと思つたんですのよ。だって、小山さんの身体が入っているのには、とても軽かつたんですもの」

「ええ、あたしもびつくりしたわ」

「でも、担いでしまったもんで、つい云いそびれていたんですわ」
講堂入口をみたが、扉はチャンと閉まっている。さつき棺桶を置いてあつた長椅子の蔭をみたが、さらに小山ミチミの姿はなかった。たださつき彼が脱ぎそろえたスリッパがチャンと元のおりに並んでいる。

杜先生は、講堂の扉を開けてとびだした。外には風もないのに花びらがチラチラと散っているばかりで、誰一人見えない。

不思議だ。

彼は大声をはりあげて、見えなくなった少女の名を呼んでみた。——しかしそれに応えるものとは並び建つ校舎からはねかえる反響のほかになんにもなかった。それはまるで深山しんざんゆうこく幽谷のよ

うに静かな春の夕方だった。

杜はガツカリして、薄暗い講堂の中にかえつてきた。女生徒は入口のところの固まって、申し合わせたように蒼い顔をしていた。

「どうも不思議だ。小山は、どこへ消えてしまったんだろう！」

杜は、壇の下に置きっぱなしになっている空っぽの棺桶に近づいて、もう一度なかを改めてみた。たしかに自分が腕を貸して、この中に入れたに違いなかったのに……。

「変だなア。——」

彼は棺の中に、顔をさし入れて、なにか臭うものはないかとかいでみた。たしかに小山ミチミの入っていたらしい匂いがする。

「オヤ——」

そのとき彼は、棺の中になにか黒いような赤いような小さな丸いものが落ちていているのに気がついた。

なんだろうと思つて、それを拾いあげようとしたが、

「呀あッ、これは——」

と叫んだ。釦ぼたんびょうか鋏はさみの頭かと思つたその小さな丸いものは、ヌルリと彼の指を濡らしたばかりだった。

彼はハツとして指頭しとうを改めた。

「おお、血だ、——血が落ちている」

その瞬間、彼の全身は、強い電気にかかったように、ピリピリと慄えた。

2

「オイ房子」

「なによオー」

「どうだ、今夜は日比谷公園の新音楽堂とかいうところへいって
みようか。軍楽隊の演奏があつてたいへんいいということだぜ」

「そう。——じゃあたし、行ってみようかしら」

「うん、そうしろよ、これからすぐ出かけよう」

「アラ、ご飯どうするの」

「ご飯はいいよ。——今夜は一つ、豪遊しようじゃないか」

「まあ、あんた。——大丈夫なの」

「うん、それ位のことはどうにかなるさ。それに僕は会社で面白い洋食屋の話聞いたんだ。今夜は一つ、そこへ行つてみよう。

君はきつと愕おどろくだろう」

「あたし、愕くのはいやあよ」

「いや、愕くというのは、たいへん悦よろこぶだろうということ、さあ早く仕度だ仕度だ、君の仕度ときたら、この頃は一時間もかかるからネ」

「あらア、ひどいわ」といつて房子は、間の襖ふすまをパチンとしめ、

「だってあんたと出かけるときは、メイキャップを変えなきやな

らないんですもの。それにあんただって、なるたけ色っぽい女房に見える方が好きなんでしょ」

「……」

「ねエ、黙ってないで、お返事をなさいってば。——あんた怒っているの」

「莫迦ばかツ。だ、だれが怒ってなぞいるものかい」

男は興奮の様子で、襖に手をかけた。

「ああ、駄目よオ、あんたア……」

房子は双もろはだ膚ぬいだまま立ち上って、内側から、襖をおさえた。

「いいじゃないか」

「だめ、だめ。駄目よオ」

髪が結えたのか、しばらくすると箆筒たんすの引出しがガタガタと鳴った。そして襖の向うからシウシウと、帯の摺すれる音が聞えてきた。もうよかろうと思っていると、こんどはまた鏡台の前で、コトコトと化粧壇らしいものが触れ合う音がした。

「どうもお待ちどおさま。——アラあたし、恥かしいわ」

さつきからジリジリしながら、長火鉢のまわりをグルグル歩きまわっていた男は飛んでいって、襖をサラリと開けた。

「アアアア——」

房子は薄ものの長い袖を衝ついたて立たてにして、髪を見せまいと隠していた。

「あッ、素敵。——さあ、お見せ」

「ホホホホ——」

「さあお見せ、といったら」

「髪がこわれるわよオ、折角結ゆつたのに——」

女は両袖をパツと左右に開いて、男の前によそ行きの顔をしてみせた。

「どう、あなたア、——」

男は、女の束そくはつ髪すがたを、目をまるくしてみつめていた。

「あんたつてば、無口なひとネ」

「いや、感きわまつて、声が出ない」

男は両手を拡げた。

女はその手を払うようにして、男の肩を押した。

「さあ連れてってよ、早く早く」

若い二人は、身体を重ねあわせるようにして、狭い階段をトンと下と下に下りていった。

そこには蚊取り線香を手にした下のお内儀かみがたっていた。

「おばさん、ちよつと出掛けます」

「あーら、松島さん、お出掛け？　まあお揃いで——。いいわねえ」

「おばさん、留守をお願いしてよ」

「あーら、房子さん。オヤ、どこの奥さんかと思違えちやったわ。さあ、こつちの明るいところへ来て、このおばさんによく見せて下さいな」

「まあ恥かしい。——だって、あたし駄目なのよ、ちつとも似合わなくて。ホホホホ」

房子は顔を真赤にして、下のお内儀の前を駈けぬけるように玄関へとびだしていった。お内儀の目には、房子の夏帯の赤いいろが、いつまでも残っていた。そして誰にいうともなく、

「ほんとに女の子って、化け物だわネ」といった。

松島準一と房子とは、京橋で下りた。そこには大きいビルディングがあつて、その二階ではキャフェ・テリアといつて自分で西洋料理をアルミニュームの盆の上に載せてはこぶというセルフ・サーヴィスの食堂があつた。二人は離れ小島のような隅っこの

テーブルを占領して、同じ献立の食べ物を見くらべてたのしそうに笑った。

「ミチミ、お美味し

「ええ、とつてもお美味しいの。このお料理には、どこか故郷にの臭がするのよ。なぜでしょう」

「ほう、なぜだろう。——セロリの香りじゃない」

「ああセロリ。ああそうネ。先生のお家の裏に、セロリの畑があったわネ」

「また云ったネ。——今夜かえってからお処刑しおだよ」

「アラ、あたし、先生でいいました？　ほんと？　ごめんなさいネ。でもあなたがミチミなどと仰おっし有しゃるからよ」

「ミチミはいいけれど、先生はいけないよ」

「まあ、そんなことないわ。あたし先生ていうの大好きなのよ。

いいえ、あなたがお叱りになるように、けっして他人行儀には響かないの。それはそれはいい響きなのよ。先生ていうと、あたしは自分の胸をすっかり抱きしめて、ひとりで悩んでいたあの頃のいじらしいミチミの姿を想い出すのよ。おお杜^{もり}先生。先生がこうしてあたしの傍にいつもいつも居てくださいるなんて、まるで夢のように思うわ。ああほんとに夢としか考えられないわ」

「ミチミ、今夜君は不謹慎にも十遍も先生といったよ。後できびしいお処^{しお}刑を覚悟しておいで」

ミチミはそんな声が入らぬらしく、小さいビフテキの片^{きれ}を頬ば

つたまま、長い吐息といきをついた。

「ねえ、あなた。あの学芸会の練習のとき、あたしが誰かに殺されてしまったと思ったお話を、もう一度してちょうだいナ」

ミチミは、テーブルの向うから、杜の顔をのぞきこむようにして囁ささやいた。

「またいつもの十八番が始まったネ。今夜はもうおよしよ」

「アラいいじゃないの。あたし、あの話がとても好きなのよ。まあ、こういう風にでしよう。——僕はすっかり落胆した。恐怖と不安とに、僕の眼前はまっくらになった。ああミチミはどこへ行つた？ 絶望だ、もう絶望だツ！」

「これミチミ、およしよ」

「——しかし突然、僕はまっくらな絶望の闇のなかに、ほのかな
光り物を見つけた。僕は眼を皿のように見張った。明みようばん 礬ばんをと
かしたように、僕の頭脳は急にハッキリ滲にじんできた。そうだ、ま
だミチミを救いだせるかもしれないチャンスが残っていたのだ。
僕はいま、シャーロック・ホームズ以上の名探偵にならねばなら
ない。犯行の跡には、必ず残されたる証拠あり。さればその証拠
だに見落さず、これを辿たどりて、正みなもとしき源を極ときわむるなれば、やわか
ミチミを取戻し得えざらん——」

「もういいよ。そのくらいで……」

「僕は鬼神きしんのような冷徹さでもって、ミチミの身体を嚙のんだ空から虚
の棺桶のなかを点検した。そのとき両眼に、灼やけつくようにうつ

つたのは、棺桶の底に、ポツンと一と雫、溜しずくっている凝ぎょうけつ血だ
つた。——おかしいわネ。そのころあたりはもうすっかり暗くな
っていたんでしよう。それに棺桶の底についていた小さい血の雫
が分るなんて、あなたはまるで猫のような眼を持っていたのネ」
「棺桶の板は白い。血は黒い。だから見えたのに不思議はなかる
う。——だが、もう頼むから、その話はよしておくれ。どうして
君は今夜にかぎって、そう興奮するのだ」

ミチミはテーブルの上に肘ひじをついて、その上に可愛あじい顎あごをちょ
んと載せた。

「あたし、なんだか今夜のうちに、思いきりお喋りしておかな
いと、もうあんたとお話しができなくなるような気がしてならな

いのよ」

「そんな莫迦げたことがあつてたまるものか。ねえ、君はすこし
芯がつかれているのだよ」

「そうかもしれないわ。でもほんとに、今夜かぎりで、あんたと
別れ別れになるような気がしてならないのよ。ああ、もつと云わ
せてもらいたいんだけど——そこで先生が、棺桶のなかから、
凝血を採集していつて、それを顕微鏡の下で調べるところから、
それは人血にまぎれもないことが分るとともに、その中からグリ
コーゲンを多分に含んだ表皮細胞が発見されるなんてくだりを……」

「ミチミ。僕は君に命令するよ。その話はもうおよし。それに日

比谷の陸海軍の合同軍楽隊の演奏がもう始まるころだから、もうここを出なくちやならない。さあ、お立ち」

男は椅子から立ちあがると、女のうしろに廻つて、やさしく肩に手をかけた。

女は、男の手の上に、自分の手を重ねあわした。そしてシツカリと握つてはなさなかつた。傍にはキャフエ・テリヤの新客が、御馳走の一ぱい載つた盆を抱えたまま、座席につくことも忘れて、
呆然^{ぼうぜん}と二人の様子に見とれていた。

明くれば九月一日だった。

「いよいよよきようから二学期だわ。——あたしきよう、始業式のかえりに、日比谷の電気局によつて、定期券を買つてくるわ」

ミチミのあたまを見ると、彼女はゆうべ結つた束髪をこわして、いつものように、女学生らしい下げ髪に直していた。紫の矢がすり銘仙の着物を短く裾あげして、その上に真赤な半幅の帯をしめ、こげ茶色の長い袴をはいた。そして白たびを脱ぐと、彼の方にお尻をむけて、白い脛すねに薄地の黒いストッキングをはいた。

杜はカンカン帽を手に、さきへ階段を下りた。玄関のくつぬぎ

の上には、彼の赤革の編あげ靴に並んで、飾りのついた黒いハイヒールの彼女の靴が、つつましやかに並んでいた。

ミチミは、すこし後^{おく}れて家から出てきた。二人は停留場の方へブラブラと歩きだした。彼は、ミチミの方を振りかえった。彼女は目だたぬほどの薄化粧をして、薄く眉をひいていた。それはどこからみても十七歳の女学生にしか見えなかつた。彼女は、杜^{もり}に見られるのを恥^{にら}かしがり、頬をわざと膨^{ふく}らまし、そして横目でグツと彼の方を睨^{にら}んだ。杜にはそれがこの上もなく美しく、そしてこの上もなくいとしく見えて、ミチミの方へ身体を摺^すりよせていった。

「ああ、また——」

ミチミは、低^{ていせい}声でそう叫ぶなり、彼とは反対の方角に身を移した。彼女はいつでも、そうした。ミチミが袴をはいて学校に通うとき、杜は一度として彼女と肩を並べて歩くのに成功したことがなかった。

「誰も変な目でなんか、見やしないよ。君は女学生だから、傍を通る人は、僕の妹に違いないと思うにきまつているよ。だからもつと傍へおよりよ」

彼は不平そうに、ミチミにいった。ところがミチミは、頬をポツと染め、

「あら嘘よ。ピッタリ肩をくつつつけて歩く兄妹なんか居やしなくつてよ」

といつて、さらに二倍の距離に逃げてゆくのであった。

二人は停留所で、勤め人や学生たちに交まじつて、電車を待った。

杜はちよくちよくミチミに話しかけたけれど、ミチミはいつも生返事ばかりしていた。これがゆうべ、あのように興奮して、彼のふところに泣きあかしたミチミと同じミチミだろうか。

向うの角を曲ひじつて、電車が近づいてきた。

杜は強い肘ひじを張つてミチミのために乗降口の前に道をあけてやった。ミチミは黙つて、踏段をあがった。そのとき彼はミチミのストッキングに小さい丸い破れ穴がポツンと明あいていてそこから、彼女の生白い皮膚がのぞいているのを発見した。

杜もつづいて電車にのろうとしたが、横合から割こんで来た乱

暴な勤め人のために、つい後にされちまつた。だから満員電車のなかに入った彼は、ミチミの隣の吊り皮を握るわけにはゆかなかつた。

やがて電車は、彼の乗り換えるべき停留所のところに来た。彼はミチミに別れをつげるために、彼女の方を向いた。

ミチミは彼のために、顔を向けて待っていた。そして彼がまだ挨拶の合図を送らないまえに、

「兄さん、いつてらっしゃい」

と、二、三人の乗客の肩越しにいとも朗かな声をかけた。しかし、おどろ愕いたことに、ミチミの声に反して彼女の眼にはなみだ涙が一ぱい溜っていた。

「大丈夫。気をつけて行くんだよ」

彼はミチミを励ますために、ぶつきら棒な口の利き方をした。そして屈くつ托たくのなさそうな顔をして、乗客に肩を押されながら、電車を下りた。――

それが女学生姿のミチミの見納めみおさだったのだ。そのときはそんなことはちつとも知らなかった。もしそれと知っていたら、どんな仕事があつたとしてもどうして彼女の傍を離れることができたであろう。

そんな悲しい別れとなつたこととは夢にも思わず、彼は丸の内のの会社へ急いだ。彼の勤めている会社は、或る貿易商会であつた。彼は精密機械のセールスマンとしてあまり華やかではない勤務を

していた。そのサラリーなども、女学校の教諭時代に比べると、みじめなものだった。しかしミチミの名を房子と変え、彼自身も松島準一と仮名しなければならぬ生活に於ては、大学卒業の理学士たる資格も、当然名乗ることができなかつたから、実力が認められるまではそのみじめさを我慢しなければならなかつた。でもその給料は、とにかく二人の生活を支え、そしてミチミを或る女学館に通学させて置くだけの余裕はあつたのである。

午前十時ごろ、彼は支配人のブラッドレーに呼ばれた。行ってみると、これから横浜の税関まで行ってくれということだった。

杜は一件書類を折り鞆のなかに入れて、省線電車の乗り場に急いだ。そして正午まえの東京を後にしたのだった。

九月一日の午前十一時四十八分、彼は横浜税関の二号倉庫の中で、あの有名なる関東地方の大震災に遭った。

そのとき彼が一命を助かったということは、まさに奇蹟中の大奇蹟だった。あの最初の大動揺が襲来したときに、この古い煉瓦建の背高い建物は西側の屋根の一角から、ガラガラツと崩れはじめた。彼は真青になったが、前後の見境もなく、傍にあつた石油缶の空き函を頭の上にひっ担ぐと、二十間ほど向うに見える明るい出入口を目がけて、弾丸のように疾走した。

大地は荒海のように揺れていて、思うようには走れなかった。出入口のアーチの上からは、ザザーツと、滝のように土砂どしゃが落ちてくるのが見えた。危い。その勢いでは、アーチをくぐった途端

に、上からドツと煉瓦の魂が崩れおちてきそうだった。しかし彼は一瞬間もひるまず、函を両手でしっかりと掴んだまま、アーチの下をくぐりぬけた。

すると頭上に天地が一時につぶれるような音がして、彼の頭はピーンといった。同時に彼は、上から恐ろしい力で押しつけられて、ドーンとその場に膝をついた。どうやら煉瓦が上から降ってきたものらしい。膝頭に灼やきつくような疼とうつう痛が感ぜられた。

そのとき杜は、死にもものぐるいで立ち上った。こんなところに、ぐずぐずしては、いつどき煉瓦壁に押しつぶされるか分ったものではない。

彼はズキズキ痛む脚を引き摺って、それでも五、六歩は走った

であろう。すると運わるく石塊に躓つまずいた。そして呀あツという間もなく、身体は巴ともえな投げをくつたように丁度一廻転してドタンと石畳の上に抛ほうりだされた。

大崩壊の起つたのは、実にその直後のことだった。大地を掘りかえすような物凄い音響と鳴動とに続き、嵐のような土煙のなかに、彼の身体は包まれてしまった。彼は生きた心地もなく、石油の空き缶を頭の上から被つたまま身体を丸く縮めて、落ちてくる石塊の当るにまかせていた。

暫くしてあたりが鎮まった様子なので、彼はこわごわ石油の空き函のなかから首をあげてみた。すると愕おどろいたことには、今の今まで、そこにあつた地上五十尺の高さを持った大倉庫は跡片もな

く崩れ落ちて、そのかわりに思いがけなく野毛のげの山が見えるのであつた。ああ、倉庫の中にいた人たちは、どうしたであろうか。彼のために、外国から到着した機械の荷を探すために、奥の方へ入っていった税関吏は、いま何処に居るのであるうか。恐らく倉庫のなかにいた百人にちかい人間が、目の前に崩れ落ちた煉瓦魂の下に埋まつているはずであつた。気がついてみると身近には彼と同じように、奇蹟的に一命を助かったらしい四、五人の税関吏や仲仕の姿が目につつた。彼等はまるで魂を奪われた人間のよ
うに、崩れた倉庫跡に向きあつて呆然ぼうぜんと立ちつくしていた。――

気がいくぶん落ちついてくるとともに、杜は先まずいまの地震が、

彼の記憶の中になく物凄い大地震だったことを認識した。次に、倉庫が潰れて、その下敷になった輸入機械は、すくなくとも三分の二は損傷をうけているだろう、この報告を早く本社にして、善後処置についての指令を仰ぐことが必要だと思った。

彼はすぐ電話をかけたかと思つた。それで税関の構内を縫つて、どこか電話機のありそうなところはないかと走りだした。

荷物検査所の中に電話機が見つかった。貸して貰うように頼んだところ、この電話機は壊れてしまつて役に立たないという挨拶だった。

彼は検査所の電話機が故障である話を聞いても、まだ目下の重大なる事態をハッキリ認識する力がなかつた。かならず東京へ電

話を通ずるつもりのは、万国橋ばんこくばしを渡ったところに自働電話函が立っているのを見つけて、そのなかに飛びこんだ。だが受話器をとりあげて、交換手をいくら呼び出してみても、ウンともスンとも云わなかった。

「これは困った。電話が通じない。電話局は電源を切られたのにちがいない」

彼は仕方なく駅の方へ行ってみることにした。

万国橋通を本町ほんちようの方へ、何気なくスタスタ歩きだした彼はものの十歩も歩かないうちに、ハツと顔色をかえた。ああなんと
いう無残な光景が、前面に展開されていたことだろう。

まず、目についたのは、恐ろしいアスファルト路面の亀裂きれつだ。

落ちこめば、まず腰のあたりまで嵌はまつてしまふであらう。

その凄すさまじい亀裂の上に、電線が反吐へどをはいたように入り乱れて地面を匍はつていて、足の踏みこみようもない。ただ電柱が酔払いのように、あちちでもこっちでも寝ている。

もっと恐ろしいものが目にうつつた。すぐ傍の二階家が、往来の方に向つてお辞儀をしていた。大きな屋根が地面に衝突して、ところどころ屋根瓦が禿はげたように剥がれている。四五人の男女がその上にのぼつて、メリメリと屋根をこわしている。——「このなかに、家族が三人生埋めになっています。どうか皆さんお手を貸して下さい。浜の家」

三人が生き埋めに？

杜は、これは手を貸してやらざるまいと思つた。四、五人の力では、この潰れた大きな屋根が、どうなるものか。

と、突然向うの通りに、叫きょうかん喚わんが起つた。人が暴れだしたのかと思つてよく見ると、これは警官だつた。

「オイ火事だ。これは、大きくなる。オイ皆、手を貸してくれッ」
どこでも手を貸せであつた。見ると火の手らしい黄色い煙が、横丁の方から、静かに流れてきた。

「オイ火事はこつちだッ」

「いや、向うだよ」

「いけねえ、あつちからもこつちからも、火事を出しやがつた」
「おう、たいへんだ。早く家の下敷になつた人間を引張りださな

いと、焼け死んでしまふぜ」

誰も彼もが、土色の顔をして、右往左往していた。悲鳴と叫喚とが、ひっきりなしに聞えてきた。大きな荷物を担いで走る者がある。頭部に白い繻帯をまいた男を、細君らしいのが背負つて駆けだしてゆく。

杜ははじめて事態の極めて重大なることを察した。これは恐ろしいことになった。横浜がこんな騒ぎでは、東京とても相当やられているであろう。彼はそこで始めてミチミの身の上を思いだした。

「おおミチミはどうしたろう。この思いがけない地震にあつて、きつと泣き叫んでいることだろう」

そうだ、これは、一刻も早く、東京へ帰らなければならぬ。
彼は鉄条網のような電線の上を躍り越えながら、真青になつて駅
の方へ駆けだした。

4

杜^{もり}がお千^{せん}に行き会つたのは、同じ九月一日の午後四時ころだつた。場所は横浜市の北を占める高島町の或る露地、そこに提灯屋の一棟がもろに倒壊して、その梁^{はり}の下にお千はヒイヒイ泣き

叫んでいた。

なぜ彼はそんな時刻にそんなところを通りかかったのか。なんとかして電車や汽車にのって、早く東京へ帰りたいたと思つた彼は、桜木町の駅に永い間待つていたのだ。しかし遂にいつまで待つても電車は来ないことが分つた。また汽車の方もレールの修理がその日のうちにはとても間に合わぬと分つて、どっちも駄目になつてしまった。

彼は二時間あまりも改札口で待ち呆けぼうをくわされたであろう。駄目と分つて、彼はだいふんがい大憤慨ていの態でそこを出たが、なにぶんにも天災地変のことであり、じんりよく人力ではどうすることもできなかつた。

このとき横浜市内には火の手が方々にあがっていた。そしてだんだん拡大の様子が、あきらかに看取された。ぐずぐずしていは、なんだか生命の危険さえ感じられたので、彼は重大決意のもとに、横浜から東京までを徒歩で帰る方針をたてた。もしうまくゆけば、途中でトラツクかなんかに乗せて貰えるかもしれない。

杜は横浜の地理が不案内であつた。東西の方向を知るにもこの日天地くらく、雲とも煙とも分らぬものが厚く垂れこめて、正しい方角を知らかねた。仕方なく彼は火に追われて右往左往する魂こんちゆう

宙の人々をつかまえては、東京の方角を教えてもらった。

それは方角を教えてもらうだけで十分であつた。近道大通を教えてもらつても、この際なんの役にも立たなかつた。なぜなら、

直線的に歩くことが全く無理だったから。倒壊した建物は、遠慮なく往来の交通を邪魔していたし、また思いがけないところに火の手が忍びよっていて何時の間にか南側の家が焰えんえん々と燃えているのに気がつくなどという有様だった。高島町の露地へ迷いこんだのも、こうした事情に基くものだった。

その露地には、まるで人けがなかった。倒れた家だけあって、全く無人境むじんきょうにひとしかった。杜はまるで夢のなかの町へ迷いこんだような気がした。

なぜこの露地が無人境になっているかが、やがて彼にも嘸のみこめるときがきた。向いの廂ひさしの間から黄こうりゆう竜りゆうが吐きだすような厭いやな煙がスーッと出てきた。オヤと思う間もなく、うしろにあつて、

パリパリという物を裂くような音が聞えたかと思う途端、火床ひどこを開いたようにドツと猛烈な火の手があがり、彼は俄にわかに高熱と呼吸いきぐるしきとに締つけられるように感じた。彼はゴホンゴホンと立てつづけに咳せきをした。眼瞼まぶたをしばたいて涙を払ったとき、彼は赤い焰が家々の軒先をつたって、まるで軽業のようにツツと走ってゆくのを見た。とうとうこの露地にも火がついたのだ。

彼は拡大してゆく事態に、底知れぬ恐怖を感じた。猛火に身体を包まれてはたまらないと思った。急速にその露地を通り抜けないともう危い。彼は足早にそこを駆けだした。そして同じ露地の倒壊した提灯屋の屋根瓦の上を渡ろうとしたときに、突然足の下からヒイヒイと泣き叫ぶ女の声を耳にしたのであった。

「た、助けてエ……。女が居ますよオ……。焼け死にますよオ……。た助けてエ」

人間の声に、生れつきのリズムがあるということ、彼ははじめて知った。それはともかく、彼はあまりにその悲惨な声に、思わず足を停めた。

女は何処にいるのかと、声をたよりに探してみると、彼女は屋根が地上を舐^なめているその切れ目のところに、うつぶせになって喚^{わめ}いていた。丸^{まるまげ}髻の根がくずれて、見るもあさましい形になってはいたが、真新しい明^{あかしちぢみ}石縮の粋^{ひとえ}な単衣を着た下町風の女房だった。しかし見たところ、別に身体の異状はないらしく、ただうつぶせになって騒いでいるところをみるとこれは気が違ったかも

知れないと思ったことだった。

「どうしたの、お内儀かみさん……」と、彼はその後によつて仮りに声をかけた。

「ああッ——」と、女は丸い肩をグツと曲げて、顔をあげた。女は彼よりも五つ六つ、年上に見えた。乱れ髪が額から頬に掛つていた。彼女は邪魔になる髪を強くふり払つて、杜の顔を下から見あげた。

「ああッ、た、助けてえ。お、拝おがみます」

女は躍とびかかるような姿勢で、杜の方に、身体をねじ向けた。

青白い蠟ろうの塊かたまりのような肉づきのいい胸元に、水色の半襟はんえりのついた膚はだ襦じゆ袷ばんがからみついていた。

「手、手、手だ。手を抜いてください」

女は両眼をクワツと開いて、彼の方に、動物園の膾炙膾炙おつとせいのよ
うに身悶えした。眉を青々と剃りおとした女の眼は、提灯のよう
に大きかった。

杜は、この女が気が変でないことに気がついた。それで駈けよ
つてみると、なるほど女の身体にはどこも障さわりがないようではあ
るが、只一つ、左の手首が、倒れた棟木むねぎの下に入っていて、これ
がどうしても抜けないのであった。

彼は女の背に廻つて、その太い腕をつかんで力まかせにグイと
引張つた。

「いた、た、た、たたッ。——」

と女は錐きりでもむような悲鳴をあげた。

杜は愕いて、手を放した。

女は一方の腕をのぼして、杜の洋服をグツとつかんだ。

「待つて、待つて。……あたしを見殺しにしないで下さいよオ、後生だから」

杜は、またそこに跣しやがんで、棟木の下に隠れている女の手首を改めた。なんだか下は硬そうであるが、とにかくその下を掘り始めた。

「だ、駄目よ。手の下には、かねのついた敷居があるのよ。掘つても駄目駄目。……ああ早く抜けないと、あたし焼け死んじまう」なるほど、露地の奥から火勢があおる焦げくさい強い熱気がフ

ーツと流れてきた。たしかに火は近づいた。彼は愕いてまた女の腕に手をかけ、力を籠めてグイグイと引張った。女はまた前のように、魂切れるたまぎような悲鳴をあげた。

「駄目だ。これは抜けない」

「アノもし、あたしが痛いといつても、それは本心じゃないんです」

「え、本心とは」

「あたしは生命をたすかるためなら、手の一本ぐらいなんでもな
いと思つてます。痛いとは決していうまいと思つているのに、手
を引張られると、心にもなく、痛いツと叫んじやうの。……ああ、
あたしが泣くのかまわず、手首を引張つて下さい。そこから千ち

切れてもいいんです。あたし、死ぬのはいや。どうしてもこんなところで死ぬのはいや」

女はオロオロと泣きだした。すべすべとした両頬に涙がとめどもなく流れ落ちる。

そのとき運命を決める最後のときがやって来た。いままでは、まだ大丈夫と思っていた火の手が、急に追ってきたのである。目の前の提灯屋の屋根瓦の隙間から、白い蕨わらびのような煙が、幾いくすじ条となくスーツスーツと立ちのぼり始めた。手首を挟まれた女は早くも迫る運命に気がついた。

「あッ、火がついた。この家に火がついた。——ああ、手がぬけない。焼け死ぬッ」

女は目を吊りあげ猛然と身を起した。そして力まかせに自分で自分の腕を引張った。

「あツ痛ツ。——あああ、どうしよう」

女は大きな失意にぶつかつたらしく、ガバと地面に泣き崩れた。と、思うと電気にかかつたようにヒョイと身体を起すと、彼に取りすがつた。

「ねえ、あんた。思い切つて、あたしの手首を切り落として下さい。刃物を持っていないの、あんた。刃物でなくともいいわ。瓦でも石塊でもいいから、たつた今、この手首を切りおとしてよウ。さもないと、あたしは、焼け死んでしまうよオ」

明らかに女は、極度の恐怖に気が変になりかけているのに違い

なかつた。そのとき、一陣の熱気が、フーツと彼の頬をうった。

そうだ、女の云うとおり、彼女はいま焼死しようとしているのだ。とういとう提灯屋の屋根の下からチラチラと紅蓮ぐれんの舌が見えだした。杜は女の肩に手をかけた。

「そうだ、お内儀かみさん。いまが生きるか死ぬかの境目だッ。生命を助かりたいんなら、どんな痛みでも忪こらえるんだよ」

女はもう口が利けなかつた。その代り彼の方を向いて大きくうちうなず肯くき、自由な片手を立てて、彼の方をいくども拜むのであつた。

杜はその瞬間、天地の間に蟠わだかまるあらゆるものを忘れてしまった。ただ女の手首を棟木から放すことのほか、地震のことも、火事のこと、身に迫る危険をも指の先ほども考えなかつた。

彼は決死の勇をふるって、女の腕をギュツと握り締めた。そして片足を前に出して、女の手首を挟んでいる棟木をムズと踏まえ

た。

「お内儀さん、気をたしかに持つんだよ」

「なむあみだぶつ——」

と、女は両眼を閉じた。

ヤツという掛け声もろとも、杜は満身の力を女の腕のつけ根に集めて、グウーツと足を踏んばった。キヤーツという悲鳴！

首尾はと見れば、女の左手首は棟木から離れた。しかしこの腕は一尺も長くなってみえた。なんとという怪異！だがよく見ればそれは怪異ではなかった。

「おお、——」

女の手首の皮が手袋をぬいだように裏返しに指先から放れもやらずブラ下つていたのであった。皮を剥ぎとられた部分は、鶏の肝臓のように赤むけだった。

杜は氣絶をせんばかりに愕いたが、ここでひっくりかえつてはと、齒をくいしばつて耐えた。^{こら}そして素早く、そのグニヤリと垂れ下つた女の手を握ると、手袋を嵌めるあの要領でスポリと逆にしごいた。それは意外にもうまく行って、手の皮は元どおりに手首に嵌つた。^{はま}しかし手首のすこし上に一寸ほどの皮の切れ目が出来て、いくら逆になであげても、そこがうまく合わなかつた。——でも女の命は遂に助かつたのだ。

気がつくくと、女は氣絶していた。

なにか手首に捲まかなければならないが、繃帶などがある筈がない。ハンカチーフも駄目だ。そのときふと目についたのは、この女の膚につけている白地に青い水草を散らした模様たつの湯巻だった。杜とつぎは咄嗟とつぎにそれをピリピリとひき裂くと、赤爛あかただれになっている女の手首の上に幾重にも捲いてやった。

杜がトラックを下りると、お千も突然、あたしも下りると云いだした。

それは翌九月二日の午前六時のこと。場所は、東京の真中新橋の上にちがいないのであるが、満目ただ荒涼たる一面の焼け野原で、わずかに橋があつて「しんぼし」の文字が読めるから、これが銀座の入口であることが分るといふまことに変り果てた帝都の姿だった。

「お内儀かみさんは、上野までのせていってもらつたら、いいのに……」

と、杜は女に云つた。

「じゃあ早く乗つとくれ。ぐずぐずしていると其処へ置いてゆく

ぜ」

と、満載した材木の蔭から、砂すなほこり埃りでまつくろになった運転手の顔が覗のぞいた。

「ええ、あたし、此処でいいのよ。運転手さん、どうもすまなかつたわねえ」

運転手はあつさり手をあげると、ガソリンの臭気を後にのこして、車を走らせていった。

「じゃ僕も、ここで失敬しますよ」

杜はカンカン帽のつばに、指をかけた。

女は狼ろうばい狽いの色を示した。

「待って。——後生ですから、あたしを、連れて行って下さい」

「困るなア。僕は僕で、これから会社へちよつと寄つて、それから浅草の家がどうなったか、その方へ大急ぎで廻らなければならぬんですよ。とてもお内儀さんの家の方へついていってあげるわけにはゆきませんよ」

女は、顔からスポリと被つた手拭の端を、唇でギリギリ噛んでいたが、

「でも、さつき聞いた話では、あたしの住んでいた本所の緑ほんじよ みどり

町ちやうはすっかり焼けてしまつたうえに、町内の人たちは、みな被ひ服ふく廠しやうへ避難したところが、ひどい旋風に遭つて、十万人もが残

らず死んでしまつたといひますからネ。あたしそんな恐ろしいところへ、とても一人では行けやしませんわ」

杜はそれをきくと太い溜息をついた。なんという勝手なことをいう女だろう。しかし女はこの焼け野原を見てほんとうに途方にくれているらしかった。

「——じゃあ、僕がすっかり用事を済ませてからでいいなら連れていってあげてもいいですよ。しかし何日目さきのことになるかわかりませんよ」

「ええ、結構ですわ。そうしていただければ、あたし本当に、——」
と、いって言葉を切り、しばらくして小さい声で「助かりますわ」とつけて、ポロポロとなみだ涙を落とした。

杜は先に立って歩きだした。女は裾をからげて、あとから一生懸命でついてきた。見るともなしに見ると、いつの間にか女は、

破れた筈の白い湯巻をどう工夫したのかすこしも破れてみえないように、うまくはき直していた。

杜は焼け土の上を履ふんで、丸の内有楽町にあつた会社を探した。すると不幸なことに、会社は、跡片もなく灰塵かいじんに帰っていた。そしてその跡には、道々に見てきたような立退先の立て札一つ建っていないかった。

やむを得ず杜は、名刺を一枚だして、それに日附と時間とを書きこみ、それから裏面に「横浜税関倉庫ハ全壊シ、着荷ハ三分ノ二以上損傷シタルモノト被ぞんぜられそうろう存候」と報告を書きつけた。そ

れをすぐ目に映るようにと、玄関跡と覚おぼしきあたりに焼け煉瓦を置き、その上に名刺を赤い五寸釘くぎでさしとおし焼け煉瓦の割れ目

へ突きたてようとしたが、割れ目が見つかからない。

「あのウ、こつちの煉瓦の方に、丁度いい穴が明いていますわよ」
後ろをふりかえってみると、例の手首を引張りだしてやった女
が、煉瓦の塊をもって、ニヤニヤ笑っていた。

「すいません」

といつて、杜はその煉瓦をひつたくるようにして取った。

杜と人妻お千とは、また前後に並んで歩きだした。——電車が
鉄棒ばかり焼け残って、まるで骸がいこつ骨こつのような恰好をしていた。
消防自動車らしいのが、踏みつぶされた墓がまのようにグシヤリとな
っていた。溝のなかには馬が丸々としたお臀しりだけを高々とあげて
死んでいた。そうかと思うと、町角に焼けトタン板が重ねてあつ

て、その裾から惨死者と見え、火ぶくれになった太い脚がニョツキリ出ていた。お千はそれを見ると悲鳴をあげて、彼の洋服をつかんだ。

杜は、胸のなかでフッフと笑った。この女とても、自分が通りかからねば、あのようなあさましい姿になっていた筈なのに、それを怖がるとはなんとということだろう、と。

彼はふたたび焼野原の銀座通へ出て、それからドンドン日本橋の方へ歩いていった。おどろいたことに、正面に見たこともない青々とした森が見えたが、これがよく考えてみると、上野の森にちがいはなかった。なにしろこの辺は目を遮るもの^{さえぎ}とてなんにもないのであった。——ああ今頃、ミチミはどうしているだろう。

「さあ、接待だ、遠慮なく持つて行って下さい」

と、路傍の天幕てんまくから、勇ましい声がした。

杜がその方をみると、向う鉢巻に、クレツプシャツという風体の店員らしいのが飛び出して来て、

「さあ、腹を拵こしらえとかにや損ですよ。——お握飯をあげましょう。手をお出しなさい。奥さんの分とともに、三つあげましょう。すこし半端だけれどネ」

そういつて若い男は、杜の手の上に、大きな握飯を三つ載せた。奥さん？

杜はハツとしたが、それが後からついてくる人妻お千のことだ
と思うと、くすぐ撥られるような気がした。

杜は、そこをすこし通りすぎたところで、お千の方をふりかえった。そして彼女の手に握飯を一つ載せ、それからまた考えて、もう一つをさしだした。

女はそれを固辞こじした。杜は自分はいいからぜひ喰べろとすすめた。女はあたしこそいいから、あなたぜひにおあがりといつて辞退した。杜はこの太った女が、腹を減らしていないわけはないと思つて、無理やりに握飯を彼女の手の上に置いた。すると握飯はハツと思うまに、地上に落ちて、泥にまみれた。

女はそれを見ると、急に青くなつて、腰をかがめて、落ちた握飯を拾いあげようとした。彼は愕いて、女を留めた。

女は杜の顔を見た。女の眼には、涙がいつぱい、溜っていた。

「——すみません。あたしが気が利かないで。——」

「なアに、そんなもの、なんでもありやしない」

杜はまた先に立って、焼野原の間を歩きだした。

(どうも、困った女だ)

と、彼は心の中で溜息をついた。この分では、この年増女房は、どこまでも彼の後をくつついて来そうに思われた。なぜ彼女は、どこかへ行ってしまわないんだろう。

彼女が臆病なせいだろうか。一家が焼け死んだと思っているからだろうか。それとも彼が倒壊した棟木の下から手首を抜いてやって、彼女の一命を助けてやったためだろうか。

そんなことが、何だというのだ。

そのとき杜は、昨夜の出来ごとを思いだした。昨夜彼は、この女を護つて、野毛山のげやまのバラックに泊つた。女は、例の手をしきりに痛がつていたので、そこにあつた救護所で手当を受けさせた。その後でも女は、なおも苦痛を訴え、そして熱さえ出てきた様子であつた。彼は到底とうていこのままにはして置けぬと思つたので、救護所の人に、どこか寝られるところはないかと尋ねた。すると、それならこの裏山にあるバラックへ行くと教えられた。

彼は女につきそつて、バラックに入れた。そこには多勢の男女が居て、後から分つたところによると、家族づれの宿泊所だつた。バラックとは名ばかり、下に柱をくんで、畳が四、五枚並べてあつた。天井は、立てば必ず頭をうちつけるトタン板であつ

た。

彼は思いがけなく、畳の上にゴロリと横になることができた。

但し畳の上といつても、狭い三尺の方に身体を横たえるので、頭と脚とが外にはみ出すのであった。それでも女はたいへん喜んで、すぐ横になった。

ところが、避難民が、あとからあとへと入ってくるのであった。だから始めは離れていたお千との距離が、前後からだんだんと押しつめられてきた。そして遂に、お千の身体とピッタリくっついてしまった。

それでもまだ後から避難民が入ってきた。

「さあ、皆さん、お互^{たがい}さまです。仰向きになって寝ないで、身体

を横にして寝て下さい。一人でも余計に寝てもらいたいですから」窮屈な号令が掛った。そして係員らしいのが、皆の寝像を調べに入ってきた。やむを得ず、畳の上の人たちは、塩煎餅しおせんべいをかえすように、身体を横に立てた。

「もつとピツタリ寄つて下さい。夜露にぬれる人のことを思つて、隙をつくらぬようにして下さいよ」

お千は遠慮して、向うを向いていたが、もうたまりかねて闇の中に寝がえりを打ち、杜の方に向き直った。そして彼女は、乳房をさがし求める幼児のように、彼の方に寄つてきたのであった。

杜は睡りもやらず、痛がるお千の腕をソツと持つていてやった。

(お千は、あのことを思っているのじゃあるまいな)

杜の耳みみたぶ朶が、不意に赤くなつた。

お千はいつの間にか、彼の左側にピタリと寄りそつて歩いてい
た。

「手は痛みますか。——」

と、彼は今までにないやさしい声で尋ねてみた。

「すこしは薄らいだようでござんす」

お千はニツコリ笑つた。

浅草橋から駒こまがた形へ出、そして吾妻橋あづまばしのかたわらを過ぎて、

とうとう彼等の愛の巢のある山の宿に入った。所はかわれども、

荒涼たる焼野原の景は一向かわらずであつた。

ただ見覚えのある石造り交番が立っていたので、彼が今どの辺に立っているかの見当がついた。

交番の中はすっかり焼けつくしたものと見え、窓外の石壁には、焰のあとがくろぐろと上^{うわ}ひろがりにクツキリとついていた。中には何かがあるのか、その前には四、五人の罹^{りさい}災者が、熱心に覗きこんでいた。そのうちの一人が、列を離れて、杜の方に近づきざま、

「——ねえ、可愛そうに女学生ですよ。袴をはいたまま、死んでいますよ」

といて、うしろを指した。

「えッ、アー女学生が——」

瞬間、彼の目の前は急にぐらくなつた。

(ミチミよ、なぜ僕は一直線におまえのところへ帰つてこなかつたんだろう！)

彼は心の中で、ミチミの霊にわび言をくりかえした。

杜はそこで勇猛心をふるい起すのに骨を折つた。どうして見ないですむわけのものではなかつた。彼はいくたびか躊躇をした末に、とうとう思いきつて、交番の中をこわごわ覗きこんだ。

黒い飾りのある靴、焼け焦げになつた袴、ニュツと伸ばした黄色い腕、生きてるようにクワツと開いている眼——だが、なんという幸いだらう。その惨死している女学生はミチミではなかつた。

「ああ、よかった。——」

彼は両手を空の方へウンとつきだして、その言葉をいくどもくりかえした。

だが、愛の巢のあつたと思うところには、赤ちやけた焼灰ばかりがあつて、まだ冷めきらぬほとぼりが、むしよう無性に彼の心をかき乱した。

そのなかに、もしやミチミの骨が——と思つて、焼けた鉄棒のさきで、そこらを掻きまわしてみたが、人骨らしいものは出てこなかった。ミチミは何処かへ、難をさけたのであろう。

立て札もなければ、あたりに見知り越しの近所の人も見えない。彼はこの上、どうしてよいのか分らなかつた。

——が、考えた末、焼け鉄棒を焼け灰のなかに立てると、それに彼の名刺をつきさした。名刺の上には、「無事。明三日正午、観音堂前ニテ待ツ。松島房子ドノ」と書いたが、また思いかえして、それに並べて、「小山ミチミ殿」と書き足した。

お千は、この一伍いちぶしじゆう一什を、黙々として、ただ気の毒そうに眺めていた。

「家族はまだ、焼け跡へはかえつて来てないらしい。——じゃ、こんどはいよいよ、あんたの家の方へ行ってみよう」

杜はそういつて、そこを立ち去りかねているお千をうながした。それから二人は、焼け落ちた吾妻橋の上を手を繋つないで、川向うへ渡った。橋はし桁げたの上にも、死骸がいくつも転がっていた。下を

見ると、赤土ににごった大川の水面に、土左衛門がプカプカ浮んでいた。その数は三、四十——いやもつともつと夥おびただしかった。

こうなると、人間というものは瀬戸物づくりの人形よりも脆もろいものであった。

さて川岸づたいに、お千の住んでいた緑町の方へいつてみた。惨状は聞いたよりも何十倍何百倍もひどかった。全身泥まみれとなり、反面にひどい火傷を負った男がフラフラと歩いていた。これに聞くと、緑町界隈かいわいの人間はみな被服廠ひふくしょうで死に、生命をたすかったのは自分をはじめ、せいぜい十名たらずであろう——なごといった。

被服廠の惨状は、とうてい筆にするに忍びない。——お千は、

オイオイ声をあげて泣いた。やがて声だけはたてなくなつたが、彼女ははふり落ちる涙を、何時までたつてもとどめ得なかつた。

「ああ、みんな死んじやつた。——あたし一人、後に残されたんだ。おお、これからどうしたらいいだろう」

両国橋の袂までくるとお千は、そういつてまた声をあげて泣きだした。そして緑町の方を向いて合掌し、くどくどとお念仏を誦じゆした。

こうして、杜とお千との寄り合い世帯が始まつた。二十五の若い男と、三十二の大年増の取組は、内容に於て甚だ錯倒的であつたけれど、外觀に於て、さほど目立たなかつた。

二人は、いろいろなところに泊つた。

興奮と猟奇にみちた新しい生活がつづいた。二人は夫婦気取りで、同じ部屋に泊ったが、それは便宜のためであつて、二人の身体の関係は、長く純潔に保たれていた。

毎日毎日、宿泊所の朝が来ると、二人は連れだつてそこを出た。それから杜は、ミチミと房子との二重の名のついた「尋ね人」の旆はたを担いで、避難民の固まつているバラックをそれからそれへと訪ねていった。お千は、まだ癒なほりきらぬ左の腕に繃帯を巻いたまま、どこまでも杜の後につき随したがつて行つた。

そうして九月一日から数えて、十二日というものを、無駄に過ごした。杜の心は、だんだん暗くなつていった。それと反対に、お千の気持はだんだん落ちつきを取りかえし、日増しに元気にな

つて、古女房のように杜の身のまわりを世話した。

それは丁度九月十三日のことであつた。

杜はいつものように、お千をともなつて、朝早くバラツクを出た。その日はカラリと晴れた上天気で、陽はカンカンと焼やきがね金くさい復興市街の上を照らしていた。杜は途中にして、ミチミの名を書いた旆を、宿に置き忘れてきたことに気がついた。しかしまささら引返すほどのこともないと思つた。でもそのときは、まさかそれが、泣いても泣ききれぬ深刻なる皮肉で彼を迎えようとは、神ならぬ身の氣づくよしもなかつた。

その日、はか図らずも彼は、もう死んだものとはばかり思つていたミチミに、バツタリ行き逢つたのである。

6

所は焼け落ちた吾妻橋の上だった。

まるで轢死^{れきしにん}人の両断した胴中の切れ目と切れ目の間を臍腑^{へいぶ}がねじれ会いながら橋渡しをしているとでもいいほど不様^{ふざま}な橋の有様だった。十三日目を迎えたけれど、この不様な有様にはさして変りもなく、只その橋桁の上に狭い板が二本ずつと渡してあって、その上を危かしい人通りが、いくぶんか賑^{にぎ}やかになっ

るだけの違いだった。

杜は人妻お千を伴つて、この橋を浅草の方から本所の方へ渡つていた。なにしろ足を載せる板幅がたいへん狭く、その上とどころに寸の足りないところがあつて、躍り越えでもしないと前進ができなかつた。杜は肥ふとり肉じしの凡およそこうした活潑な運動には経験のないお千に、この危かしい橋渡りをやらせるのにかなり骨を折らねばならなかつた。

「さあ、この手につかまつて——」

と、杜が手を差出しても、お千はモジモジして板の端にふるえているという始末だった。そのうちに彼女は、水中に飴のように曲つて落ちこんだ橋きょう梁りょうの間から下を見て、まだそこにプカプ

カしている土左衛門や、橋の礎石の空処に全身真赤に焼け爛れて
死んでいる惨死者の死体を見るのであつた。すると両足がすくん
でしまつて、もう一步も前進ができず、ただもうブルブルと慄え
ながら、太い鉄管にかじりつく外ほかなかつた。

それは震災の日の緊張が、この辺ですこし弛ゆるんだため、さきには
気がつかずに通りすぎたものが、ここでは、急にヒシヒシと彼
女の恐怖心をあおつたものだろう。——杜は仕方なく、そういう
ところで、この大の女を背負うか、或いは両手でその重い身体を抱
くかし、壊れた橋桁の上を渡つてゆくしかなかつた。それはたい
へん他人が見て気になる光景だつたけれど、この際どうにも仕方
がなかつた。さもないとお千は川の中へボチャンと落ちてしまふ

にきまつている。

ことに始末のわるいことは、この場になつてお千が意識的に杜にしなだれ懸かかることだつた。彼女としては、恩人でもあり、またこの上ない情念の対象である彼に対して、せめてこういうときでも露骨ろこつにしなだれかかるより外、彼女の気の慰められる機会はなかつたからでもあつた。それほど杜という男は、彼女にしてみればスパナーのように冷たく、そして焦じれたい朴念仁ぼくねんじんであつた。「これ、そう顔を近づけちゃ、前方まえが見えなくて、危いじゃないですか。一緒に河の中へおつこちてしまいますよ」

「ウフフフ……」とお千はヒステリックに笑つた。そして、わざと唇を彼の耳じ朶だのところに押しつけて「あたしネ、本当はお前さ

んとこの橋から下におつこちたいのよ、ウフフフ」

といつて、太い両足を子供かなにかのようにバタバタさせるのであつた。

「危い危い。冗談じゃない。そんな無茶を云うんだつたら、僕はそこで手を離して、君だけ河ンなかへ落としちまう——」

「いやよいやよ。お前さんが離しても、あたしは死んだつてお前さんの首を離しやしないわ、どうしてお前さんはそう邪怪じゃけんなんでしょうネ。いいわ、あたしや、ここで死んじやうわよ、もちろんお前さんを道づれにして——」

「こーれ、危いというのに。第一、みつともない——」

といったが、お千はもうすっかり興奮してしまつて、そこが人

通の多いところであることも、白昼であることにも、もう弁えがわきまないように見えた。杜の頸を巻いている彼女の腕がいきなりグツと締るかと思うと、最前から彼の耳朶に押しあてられていた熱い唇が横に移動して彼の頬の方から、はては彼の唇の方へ廻つてくるきせい氣勢を示した。杜は近よつてくるお千の生ぐさい唇の臭を嗅においいだ。あわてて顔を横に向けようとしたが彼の頸動脈は、お千のためにもあまりにも強く締めつけられていた。そのためになんだか頭がポーツとしてきた。

「あぶないッ——これ止せッ」

「これ、生命を粗末にするなッ」

突然大きな声が耳許にして、二人の身体は両方から支えられた。

——杜はその力の下からフーフー息を切った。そして誰か通行人が、自分たちのために叫び、自分たちを支えてささいてくれることに気がついた。

「さあ、落着いて落着いて」と見知らぬ声が云った。

「まあ無理はないよ、お互いに無一文何にもなしになったんだからネ。しかしお前さん方もまだまだ若いんだ。もつと気を大きく持ち、これから夫婦して共稼ぎをするなりしてもう一度花を咲かす気持でなくちやあ——」

「そうだそうだ」と別の声が云った。

「全く死にたくもなるよ。俺も昨日それをやりかけた。しかしそれは死神が今俺たちについていると知って止したんだ。死神のや

つのせいで、今ならとても簡単に死ぬるような気持ちになっているんだ。しかし考えて見なよ、このとおり多い惨死者のなかで、俺たちはともかくも助かっているんだ。なぜ助かったか、そこを考
えなくちやいけない。ねえ、貴郎あなたがた——さあお内儀かみさんも元氣を出して、下りて歩きなせえよ」

要らざる訓戒とは思ったが、それを聞いているうちに、杜はそれがなんだかしみじみ自分の心をうっているのに気がついた。そして自分も、すっかり氣力を失って本当に夫婦心中をしようと思
っていたらしい気がしてくるのだった。不思議な気持ちだった。
もちろん後で考えると、それは震災の大きなショックから来た神
経衰弱症にちがいをなく、莫迦ばか莫迦ばかしいことではあったけれども——

。

お千は、彼の首に廻していた両腕を解いて、おせつかいな通行人の薦すすめるとおりに、下に下りた。しかし彼女はいきなりワーツと大きな声をあげると、杜の胸に顔を埋めて泣きつづけた。

「可哀想に——。無理もねえや。妙齡としごろの女が桐の箆笥ごと晴着をみな焼いちまって、たつたよれよれの浴衣一枚になつてしまつたんだからなア」

と、同情の声が傍から聞えた。二人は全く夫婦心中者に見られてしまつたらしい。

杜はお千の背中を抱いたまま、不思議に自然に、その場の気分になつていた。が、そのとき不ふ図と頭を廻して横を向いたとき、彼

は卒倒せんばかりに愕おどろいた。――

「おお、ミチミ――」

ミチミが生きていた。ミチミは彼のすぐ傍にいた。僅か一本の太い鉄管を距へだてて、その向うにいた。鉄管の上に両手をのせてジーツと二人を見詰めていた。すべてを彼女は見ていたのだろうか。

ミチミの顔は真青だった。

ミチミは手てぬぐい拭を、カルメンのように頭髮の上に被つて、その端を長くたらしめていた。そして見覚えのある単衣ひとえを着ていた。それは九月一日、彼と一緒に家を出て、電車どおりにゆくまでにしげしげ見た見覚えのある模様の単衣だった。そしてその単衣の襟は茶褐色に汚れ、そのはだけた襟の間からは、砂埃りに色のつい

た——だがムツチリした可愛い胸の膨らみが、すこしばかり覗のぞいていた。ミチミも随分苦労したらしい。

「ミチミ——」

と、杜はお千を引離して駆けようとしたが、この時お千はまた両腕を彼の頸にまわして、力まかせにぶら下つてきた。離すどころの騒ぎではなかった。

ミチミは唇を、ワナワナ慄わせていた。その下ぶくれの唇を、やがてツーンと前につきだしたかと思うと、

「莫迦——」

と只一言。叩きつけるように云った。

「これミチミ、何をいうんだ——」

ミチミはツと身を引いたかと思うと、彼女のうしろに立っていた二十歳あまりの、すこぶる長身の青年の、オープン襟の襟に手をかけて、何ごとか訴えるような姿勢をとった。

その男はフンフンと、彼女の話の話を聞いているようであったが、やがて杜の方に向つて錐きりのように鋭い嫌悪けんおの眼がんぼう眸まを強く射かけると、長い腕をまわして、ミチミの身体を自分の逞たくましい肩の方へ引きよせ、そしてグツと抱きしめた。

「——さあ行こう、ミチミ」

男はそういつて、杜に当てつけがましく、ミチミを抱か**ん**ばかりにして、焼け橋梁はしの上を浅草側に向つて立ち去るのであった。

「ミチミ——」

杜は魂をあずけた少女ミチミの名を、もう一度声に出す元気もなくなつて、わずかに口のなかでそう叫んだ。いやいや、おお愛するミチミ、私の魂であるミチミ！ という呼び方も、いまは自分だけのものではなくなつたらしい。あの颯さつ爽そうたる青年、見るからに文化教育をうけたらしいスツキリした東京ツ児——それが百年も前からミチミを恋人にしていたような態度で「ミチミ、ミチミ！」と呼んでいるのだつた。ああ万事休す矣。また何という深刻な宿命なのだろう。お千と自分との無様な色模様ぶざまを見せたのも宿命なら、いまさらこんなところでミチミに会つたのも宿命だつた。

ミチミは頬を膨らまし、背中を向けて向うへいつてしまった。

杜には、あれがいつものミチミなのだろうかと思つたほど、彼女の身体はあかの他人のように見えた。お互に理解し合うことはありながら、こうなつては、たとえ何から何までうちあけても、その一部として信用されないかもしれない。それほど致命的なこの場の破局だった。杜は痛心をおき圧えることができなままに、それからズンズン一人で歩きだした。

橋桁を渡つて、本所区へ――

そして彼は当途あてどもなく何処までもズンズン歩いていった。まるで天狗に憑つかれた風ふうのように速く――。

「よう、あんたア、——」

と、お千が追いつがるようにして、後方うしろから声をかけた。

「……」

杜はお千の声を聞いてピクンとした。しかし振り向き返りもしないで、相変らず黙々としてズンズン歩いていった。

「よう、何処まで行くのさあ。——」

それでも彼は黙って歩みつづけた。

するとお千がバタバタと追いついてきて、彼の腕をとらえた。

「こんな方へ来てどうするの。柳島を渡つて千葉へでも逃げるつもりなのかネ」

でも、彼は執拗に黙っていた。お千は怒りを帯びた声で、「チヨツ」と舌打をし、彼の腕を邪険じゃけんにふり解ほどいた。

「なんだい、面白くもない。黙つて見ていりや、いい氣になつてサ。いくら年が若いだつて、あのざまは何だネ。あんな乳くさい女学生にゾツコン惚れこんで、手も足も出やしないじゃないか。あたしや横から見ていても腹が立つつちやない。お前さんはなかなかしつかりもんだと思つて、あたしや前から——イエ何さ、しつかりした人だと思つてたのさ。ところが今のざまですつかり嫌いになつちやつた。嫌いも嫌いも大嫌いさ。あたしやもうお前と

歩かないよ。飛んだ思いちがいさ。大河から土左衛門の女でも引張りあげて、抱いて寝てるがいいさ。意気地なしの、大甘野郎の、女たらしの……」

お千はまた興奮して、地団太じだんだを踏み、往来の砂すなほこり埃をしきりと立てていた。

杜は後向きになつて、じつと足を停めていた。

「じやお前さんともお別れだよ。あたしや好きなどころへ行つちまうよ。——ああ、あのとき横浜の崩れた屋根瓦の下で焼け死んじやった方がどんなに気持がよかつたか分りやしない。薄情男！
女たらし！」

そのとき杜は、顔をクルリと廻して、お千の方を見た。お千は

不意を喰らつて狼狽ろうばいし、開あきかけた口を持って余し気味にただ大きな息を呑んだ。

杜はツカツカとお千の方に寄つていった。彼の勢いに吞まれたお千がタジタジとなるのを追いかけるようにして、杜はお千の手首をムズと補えた。肉づきのいい餅のように柔かな手首だった。

「——僕と一緒にいてくるんだ。逃げると承知しないぞ」

「ええッ。——」

「意気地なしか大甘野郎かどうか、君に納得のゆくようにしてやるんだッ」

杜はお千の手首を色の変るほどギュツとつかんで、サツサと歩きたした。杜のこの突然の変った態度を、お千はどう理解するいとま違

もなく引張られていった。手首は骨がポキンと折れてしまいそうに痛んだ。その痛みが、彼女の身体に、奇妙な或る満足感に似たものを与えた。お千は引摺ひきずられるようにして、でも嬉しくもなさそうに眼を細くして、杜の云いなり放題にドンドン引張られていった。杜は柳島までも行かなかつた。丁度ちやうど吾妻橋と被服廠跡との丁度中間ほどにある原庭町はらにわちやうの広い焼け野原のところ——といつても町名は明かではなく、どこからどこまでも区切のない茫ぼ漠うぼくたる一面の焼け武蔵野ヶ原であつたけれど——この原庭と思われる辺に来て、杜は不図足ふとを停めた。

「この辺がよかろう」

杜は誰に云うともなくそう云つた。

側かたわらには小さな溝が、流れもしないドロソとした水を湛たたえている。それから太い大樹の無惨な焼け残りが、まるで陸に上つた海坊主のような恰好をして突立っている。なんだか気味のわるい不吉な形だった。すこしばかりこんもりと盛り上つた土塊どかいや、水の一滴もない凹くぼみ、それから黒くくすんでいる飛石らしいのが向うへ続いて、賑にぎやかに崩れた煉瓦塀のところまで達している。どうやら此処は、誰かの邸宅の庭園だったところらしい。

杜は怪訝けげんな顔つきをしているお千の方に振りかえつた。

「——さあ、まず焼けトタンを十枚ほど拾いあつめるんだ——」
杜は手をふつて、お千に命令を下した。

お千は杜の権幕けんまくに愕おどろいて、命令に服従した。そして邸跡にト

タン板を探しはじめた。

「オイ、早くしろ。腕なんか釣っているのをよせッ。両手を使つてドンドンやるんだ」

お千は目を瞠^{みは}つて、釣っていた左の手を下ろした。

トタン板が集められると、こんどは柱になるような木が集められた。溝の中に落ちていた丸太やら、焼け折れている庭木などが、それでも五、六本集められた。つづいて水びたしになっていた空虚の芋俵が引上げられ、その縄が解かれた。太い針金が出てきた。そうした建築材料が集まると、杜はそこに穴を掘つて棒を立てた。それから横木や、床張りの木を渡し、屋根には焼けトタン板を何枚も重ねあわした。——バラック建がこうして出来上った。

もう正午に近かった。

二人は救護所まで出かけて、昼食の代りにふかし芋を貰つてきた。それを喰べ終ると、二間ほどある縄切れを持って、拾い物に出かけた。

欲しいものは、なるべく大きな板切れと、なるべく広い布であつた。それにつづいて蓆むしろか綿か、さもなければ濡れた畳であつた。

二人は眼を光らせて、それ等のものを探して歩いた。はじめは、焼け跡に立ちかけている本物のバラック建の家や、河や溝の中を探しまわっていたが、そのうちにそんなところよりもむしろりさい罹災者しやあての配給品が集まってくるころの方に、物資が豊かで

あることに気がついた。それは多くは橋の袂たもととか、町角まちかどとかに

在った。

欲しいものは、たいてい重かった。二人の力はすぐに足りなくなった。一つの俵を引きずって帰っては、また駈け足をしていて、別な一つの函を担いで帰るといふ有様だった。

でも人間の一心は恐ろしいもので、かなり豊富な畳建具の代用材料が集まった。そのときはもう日がすっかり傾いて、あたりはだんだん暗くなっていった。

二坪ばかりの小屋のうち、僅かに一坪ほどの床めいたものを作り、その上に俵をほぐして、むしろ筵を敷いた。その上に藁わらを載せた。どうやら寢床のようなものが出来た。

まだ作らなければならぬものが沢山あったけれど、もうあたり

が暗くなって駄目だった。途中で貰ってきた手拭づつみの握り飯を二人で喰べると、昼間の疲れが一時に出てきた。

二人はだいたい睨にらみ合つて、無言の業をつづけていたが、疲労から睡魔の手へ、彼等はなにがなんだか分らないうちに横にたおれて前後不覚に睡つてしまった。

次の日の暁が来たのも、もちろん二人は知らなかった。どつちが先とも分らず目が覚めたが、そのときはもう太陽が高く上つていて、バラツクの外には荷車がギシギシ音を立てて通つてゆくのが聞えた。

杜は目が覚めたが、何もすることがないので、そのままゴロリと寝ていた。頭と足を逆に寝ていたお千は、藁の中に起きあが

った。そして下駄をつっかけると、天井の低い土間に突立^{つた}つて、物珍らしそうに小屋のうちを眺めまわした。お千がなんとなく嬉しそうにニコリと微笑^{ほほえ}んだのを、杜は薄眼の中から見のがさなかつた。

お千が小屋の外に出てゆくと、間もなくガヤガヤと元気な人声がした。なんだか木の箱がゴトンゴトンとかち会う音などが聞えた。なんだろうなと思っているうちに、お千がヌツと小屋のなかに入ってきた。彼女は両手に沢山の品物を抱えていた。

「あんた、こんなに貰ったのよ。みな配給品だわ。林檎^{りんご}もあるわ。缶詰に、ハミガキに、それから慰問袋もあんたの分とあたしの分と二つあるわよ。——さあ起きなさいよオ」

お千はすっかり機嫌を直していた。

配給品が時の氏神うじがみであつた。二人はそれを並べて幾度も手にとりあげては、顔を見合わせて笑つた。

「昨日のことは——あのことは、あんた忘れてネ。あたし、どうかしていたのよ。いくらでも謝るわ」

お千はいい潮時しおどきを外さず、愧はずかしそうに素直に謝つた。

「うん、なアに、なんでもないさ。——」

杜はいままでに一度も懸けたことのない優しい言葉を云つた。その優しい言葉は、お千に対してよりも、自分自身の侘わびしい心を打つた。彼はなんだか熱いものが眼の奥から湧いてくるのを、グツと嚙のみこんだ。

8

昨日に続いて、杜とお千とは、また連れだつて拾い物に出かけた。

ちよつとした煮物の出来るかまど竈も出来たし、ミカン函を改造して机兼チャブ台も作った。裏手には、お千のために、往来からは見えないうちに眼かくしをしたけいべんがわや軽便廁をこしらえた。入口には、杜の名をボール函の真に書いて表札のつもりで貼り出した。名前

の横には、彼の勤め先である商会の名も入れて置くことを忘れなかつた。

こうして、どうやら恰好のついた一家が出来上つた。拾い集めて来た材料は、むしろ余つたくらいであつた。しかしそれが今の二人には堂々たる財産なのだった。

「あんた、お金持ってないの」

「うむ。——少しは持っているよ。三円なにがし……。なんだネお金のことを云つて」

「あたしはもうお金がないのよ、ずっと前からネ。それであんたお金持っているんなら、蠟燭ろうそくを買わない。今夜から、ちつと用のあるときにつけてみたいわ」

「なアんだ、蠟燭か。君は暗いのが、こわいのだな」

「こわいって訳じゃないけれど、蠟燭があつた方がいいわ」

「よし、とにかく買おう。じゃこれから浅草まで買いにゆこうよ」
もう日暮れ時だった。

二人は吾妻橋を渡つて、浅草公園の中に入つていった。仲見世はすっかり焼け落ちて、灰かきもまだ進まず、殆んど全部がそのままになつていた。ただ道傍や空地には、カンテラや小暗いこくら蠟燭を点して露店ともしが出ていた。芋を売る店、焼けた缶詰を山のように積んでいる店、西瓜すいかを十個ほど並べて、それを輪切りに赤いところを見せている店、小さい梨を売る店——などと、食い物店が多かった。

蠟燭は、仁王門を入ったところの店に売っていた。杜はお千と相談して、五銭の蠟燭を四本と、その外に東北地方から来たらしい大きな提灯^{ちようちん}一個八銭とを買った。

「おお、生ビールがあるじゃないか。こいつはいい。一杯やろう」
杜は思いがけない生ビールの店を見つけて舌なめずりをした。

彼はお千を手招きして、二つのコップの一つを彼女に与えた。杜の腸に、久しぶりのアルコールがキューツと浸^しみわたった。なんとも譬^{たと}えようのない爽快さだった。

彼は更にもう一杯をお代りした。

お千はコップを台の上に置いて、口をつけそうになかった。

「お呑みよ。いい味だ。それに元気がつく」

そういつて杜はお千にビールを薦^{すす}めた。お千は恐^{おそ}る恐^{おそ}るコップに口をつけたが、やはりうまかつたものと見え、いつの間にかすっかり空けてしまった。しかしもう一杯呑もうとは云わなかつた。三ばいの生ビールが、杜をこの上なく楽しませた。思わない御馳走だった。震災以来の桁ちがいの味覚であつた。彼はお千に、では帰ろうと云つた。お千は、ちよつと待つてと云いながら、ビールを売る店のお内儀^{かみ}にコソコソ耳うちしてそのうしろの御不浄に出かけた。

やがて二人は、小暗い道を、ソロソロ元来た方に引返していった。

雷門を離れると、もう真暗だった。そこで買って来た提灯をつ

けたお千は吾妻橋の脇の共同便所の前で、杜を待たせて置いて、また用を達しに入った。

吾妻橋は直したと見えて、昨日よりも遥かに安全に通りやすくなっていたが、それでも提灯の灯があればこそ僅かに通れるのであった。しかし夜のことで、壊れた橋の態さまやら、にごった水の面などが見えなくて、かえってよかつた。

橋を渡りきって、石原の大通りを二人が肩を並べて歩いているときのことだった。

「ねえ、あんたア。あたしどうも辺なのよ。またおしもに行きたくなつた」

「フフン、それはビールのせいだろう」

「いいえ、けさからそうなのよ。とてもたまらないの。また膀胱ぼうこうカタルになったと思うのよ。——」

とまで云つたお千は、急に身体をブルブルツとふる慄ふるわせた。そして彼に急を訴えると、その場にハタとしゃがんで、堤を切つたよ
うな音をたてて用を達した。杜は提灯片手に、その激しい音を聞
きながら、あたりに注意を払つていた。——お千は絶対無我の境
地にあるような姿勢をしていた。

杜はその夜、小屋にかえつてから、遂にお千の身体を知つた。

志操堅固な杜だったけれど、どういうものかその夜の尿の音を
思いだすごとに、彼はどうにも仕方のない興奮状態に陥つてしま
い、その後もその度に、彼は哀れな敗残者となることを繰り返かえ

した。

十七日から、彼は丸の内へ出勤することになった。商会は焼け跡に、仮事務所を作り、再び商売に打って出ることになったからである。

「ね、早く帰って来てネ。後ごしょう生だから……」

とお千は杜の出勤の前に五度も六度も同じことを繰返し云った。「うん、大丈夫だ。早く帰ってくる。——」

そういつて出かけたが、彼の帰りは、いつも日暮時になった。

お千は門口に彼の帰ってきた気配がすると、子供のように小屋の中から飛んで出て来た。そして半泣きの顔にニツと悦びの笑みえを浮べ、そしてその後で決ったように大きな溜息をついたのであつ

た。いつもきまつてそのようであつた。

「きようネ」とお千は或るとき彼を迎えて夕炊ゆうめしの膳を囲みながらいった。

「ホラこの前吾妻橋の上で行き会つたあんたのいいひとネ。あの女学生みたいな娘がサ、向うの道を歩いていたわよ。あんた嬉しいでしょう。——まあ憎らしい」

などといつて、はてはキヤアキヤアふざけるのであつた。

またその後の或る日の出来ごとだつたが（後で考えるとそれは二十三日のことだつたが）彼が会社から帰つてみるといつもは子供のように胸にとびついてくる筈のお千が、迎えに出もせず、小屋のなかに蒼い顔をしてジツと座っているのを発見した。彼は、

留守中なにごとかあったのだなと、すぐ悟った。

「いやに元気がないじゃないか。どうしたんだ」

と問えば、

「いえ、なんでもないの」

と、お千は蒼い顔を一層蒼くして、強くかぶりを振った。

「変だな。何かあるんだろう。云ってみたまえ」

彼女は、もう口を堅く閉じて首を左右に振った。

杜はどうしてお千に真実を云わせたものだろうか、首をひ

ねって考えていた。

「ごめんなさいまし。——」

そのとき門かどぐち口に、男の声で、誰か訪とう者があつた。

「あッ、——」

とお千は、電気に懸ったように飛び上り、すぐさま門口に両手を拡げて立ちふさがった。

「あんたは出ちやいけない。なんでもよいの。あたしが話をつけるから……」

そういつているとき、入口の幕をおし分けて、五十がらみの大きな男の顔がヌツと現われた。彼の顔は、渋柿のように真紅まっかであった。

「いやあ、これはお安くないところをお邪魔つかまつ仕りまして、なんとも相済みません、ねえ、こちらの御主人さんへ——」

五十男は、不貞ふてぶて不貞しい面つきで、ノツソリ中へ入ってきた。

「き、君は何者だ。ここは僕の住居だ。無断で入ってくるなんて、君は——」

「はッはッはッ、無断で無断でと仰おっしゃ有りますが、実はこのことについて貴公きこうに伺きこいたいのだ」

「なんだとオ——」

と、杜も強く云いかえした。

「フン、お千がたいへんお世話になっていまして、お礼を申し上げますよ。貴公は、人の女房にたいへんに親切ですネ」

「なにッ——では君は」

「もちろんお察しのとおり、私はお千の亭主でさあ。区役所の戸籍係へ行つて調べてきたらいいだろう。よくも貴公は、——」

「ああ、そうだったか。貴方は、死んだことと思つていたが——」
「ちやんと生きていらあ。貴公にもそれがよく見えるだろうが。
さあどうしてくれる」

「さあ——」

といつているところへ、表の方で、なんだか意味はわからない
が、呼んでいるような声がした。すると五十男は、急に慌あわてだし、
「ちえツ。——まあそのうち、改めて来るから、そのときは性しょう
根ねを据すえて返答をしろ、いいかッ」

と云い捨てて、裏の便所の方から、大狼狽だいろうばいの態で出ていった。
杜はホツと溜息をついた。

お千も同じように、ホツと吐息をついた。そして彼の方に媚こび

るような視線を送って、

「——あいつは悪い奴なのよ。あたしの本当の亭主じゃなくて、その前にちよつと世話になつていたこうじまち麴町の殿様半次という男なのよ。明るいとところへ出られる身体じゃないんだけれど、どういうものか今は飛びあるいていて、きよう昼間、運わるくあたしを見かけていんねん因縁をつけに来たのよ。あなた心配しないでネ」

「でも、こうなつては僕も——」

「心配いらぬのよ。あたしに委せて置いてちようだいよ」

「そうだ、丁度会社の方も仕事を始めて、給料をくれることになつたから、どこか焼けていない牛うしごめ込か芝の方に家を見つけて移ろうか。それともここで君と——」

「いやいやいや」とお千は大きくかぶりを振って、その先を云わせなかつた。

「引越した方がいいと思うわ。あたし、どこへでもついてゆくわ」
そういつたお千は、そこでまた身体をブルブルと慄わせると、慌てて座を立て、奥へ駈けこんだ。

9

お千が、冷たい骸むくろとなつたのは、その翌日のことだつた――。

その日、社は会社へ出たが、戦争のように忙しい仕事の中にいて、ともすれば仕事をまるで忘れてしまうことがあった。彼はなにかの隙があつたら、お千と一緒に住む家を、焼け残った牛込か芝かに求めたいものだと思つて焦つていた。だが彼の希望は、あとからあとへと押しよせてくる会社の仕事によつて、完全に押し潰されてしまった。しかもその日は、夕方になつても仕事の段落がつかず、遂に会社を出たのが夜更の十時だった。会社に泊つてゆけという上役や同僚たちの勧めであつたけれど、彼はそれをふり切るようにして、懐中電灯片手に、お千の待っている家路に急いだのであった。

帰りついたのは、かれこれ十一時であつたらうか——。

駈け足も同然に、バラツクの幕を押しわけて家のうちに飛びこんだ杜は、その場にハツと立ち竦すくんだ。そこに海軍毛布を被つて寝ていると思つたお千の姿が見えないのであつた。寢床はそこに敷しきつ放ばなしになつていたが、藻ぬけの殻からだつた。しかし毛布は、人間の身体が入つていたことを証明するかのようになつ、トンネル形にふくれていた。枕は土間にとんでいた。

「お千、オイお千、——」

杜は女の名を呼びながら、廁かわやを明けてみた。だがそこにもお千の姿はなかつた。

「——とうとう、お千のやつ、逃げてしまつたんだな」

杜は悲しみと憤いきどおりおりに、胸がはり裂けんばかりになつてきた。

考えてみれば無理のない話でもあった。昔世話になつた五十男といえ、ひと通とおりやふた通でない深い情交であつたに違いない。杜とはほんの僅かなことで結びついただけであつた。ことに震災というものがどこまで深刻なものやら判らなかつた時代に、彼はお千から大いに頼られたのであつて、震災もここに二十四日、惨禍さんかは大きかつたけれど、もうそれにもいつしか慣れてしまつて、始めの大袈裟おおげさな恐怖や不安がすこし恥かしくなる頃であつた。そういう時にお千が杜のところを飛び出していったのは一向不自然ではないと思つた――。

彼はゴロリと横になつた。

ミチミの顔が不図ふと浮んできた。それはどこやらすねているよう

な顔だった。

（ミチミはどうしているだろうか。いまごろは、やはりこうしたバラツクの中で、あの長身の青年の腕に抱かれて睡っているだろうか？）

などと、しきりにミチミのことが思い出された。お千しつそう失踪の夜に、お千のことよりもミチミのことが想いだされるのはどうしたことであろう。それは杜自身が極めて心の弱い人間であつて、悲哀に対して正面から衝突してゆく勇気がないために、その悲哀を紛らすための妥協的代償を他に求めたがるのに外ならなかった。杜は夢から夢を見た。ただ暗い床のうえに横よこたわつていただけのことであつたらうつらとしていた。何度目かに目が覚めたとき、ト

タン板の裂け目から暁の光りがほんのりと白く差しこんでいるのに気がついた。

彼は改めて寢床のまわりを見廻した。もしやお千の姿がそこに帰ってきてはいはしないかと思つたが、それは空しき夢であつた。

彼女の寢床は、昨夜のとおり藻ぬけの殻であつた。

ただ彼は、まくらもと枕許に近い土間の上に、昨夜発見しなかつたも

のを見出した。いや、それは発見はしたのであろうがつい気がつかなかつたのであろう。それは見慣れないたばこ葎の吸い殻がらだつた。――

――その葎は「敷島！」

杜は「ゴールデンバット」ばかり吸つていた。敷島は絶対に吸わなかつた。お千も吸わない。

「敷島」の吸殻は三つほどあった。取りあげてみるとそこへ捨てて間もないように見えるものだった。

もう一つの「敷島」の吸殻を発見した。それは土間の中に堅く埋まっていた。土間の上はなにかを引摺ったように縦の方向に何本もの条溝すじがついていた。いま発見した吸殻はその下に埋まっていたのである。

土間の上の何本もの条溝は何のためについたのであろう。今朝がたは、こんなものを見なかったことは確かだ。

杜はこの条溝の伸びている方向に目をやった。その条溝は裏口の幕の下に続いて、まだそこから外に伸びているようであった。杜はそれをボンヤリ見つめていたが、そのうち起き上って土間に

下り、裏口の幕を搔き分けて何気なく外を見た。

そのとき彼は、実に不思議な光景を見た。

裏口の正面に、焼けて坊主になり、幹だけ残った大樹があつた。そこに人間が青い脚をブランとして垂れて下つていたのであつた。それが暁の光を浴びて、なんとなく神々しい姿に見えた。——
お千が死んでいる。

杜は、わりあいに愕かなかつた。ただしそれはほんの最初のうちだけであつたけれど。

「お千が死んでいる。——お千はなぜ死んだのであろう？」
杜は裏口に立つて、ボンヤリ死体を見上げていた。

よくよく見てみると、お千の首にまきついている縄は、焼けた

大樹の地上から八、九尺もある木の股のところ懸っていた。繩はそこでお仕舞いになつてはいず、股のところから大樹の向う側にずっと長く斜に引き張られているのではないか。繩の末端は、大樹の向う三間ほど先にある手水鉢ちようずばちの台のような飛び出た巖いわおの胸中に固く縛りつけられてあつた。

「ああ、これは自殺じゃないんだ！」

杜はハツと顔色をかえた。

自殺の縊死いしだと思つていたのが、繩の引つ張つてある具合から、これは他殺でないと出来ないことだと気がついた彼はにわかに恐怖を感じた。お千は殺されたのだ。疑いなく彼女は暴力によつて此処に釣り下げられたのである。

誰だ？ お千を殺したのは？

杜はだんだんと周章あわてだした。

さあ大変である。すくなくとも、彼自身は容疑者の一人として、警察署に連行されるであろう。自分はなにかへまをやっていないであろうか。待てよ——。

杜は、裏口の幕をはねのけるようにして、小屋のなかに飛びこんだ。

彼はそこに今の今まで自分が横わっていた寢床を見た。その隣にはお千の空虚くうきよの寢床ねどこがあった。これはいけないと思つて、彼は前後の見境もなく、今まで寝ていた自分の寢床を畳んで横の方に近づけた。

そのとき、寢床の下の塵むしろの上に、ポツンと赤黒い血の痕がついているのを発見して、彼は驚愕を二倍にした。毛布にも附着しているだろうと思って改めてみると、幸いなことにほんの僅かづいていただけだった。彼はそここのところの毛を一生懸命で撈むしった。

塵の上の血痕をそのまま放置しておくことは、彼の弱い心が許さなかつた。彼はナイフを出して、その血痕の周囲を塵のまま四角に切りとつた。

毛布の血痕と、塵に赤黒く固まりついている血痕とは捨てては危険である。彼は咄嗟とつさに、その二つの証拠品を、マッチ函の中に収しまった。これで血の脅威からは脱れることができた。

もう何か残っていないかと、あたりを見廻した。

「おお、これア何だツ」

妙なものがお千の寢床の向う側に落ちていた。拾いあげてみると、それは古風な縫い刺し細工の煙草入であった。彼は急いで中を明けてみた。中には口切煙草が沢山入っていた。その煙草は「敷島」だった。

「ああ『敷島』だ。——」

胸躍らせながら、彼は中に残っている煙草の数を数えた。丁度十六本ある。

十六本の「敷島」——そして土間に落ちている四本の「敷島」の吸殻！

これ等は、杜が事件に対して嫌疑薄けんぎうすであることを証明してく

れるであろうと思つたので、そのまま放置して置くことにした。

彼は煙草入れを、また元のように、お千の寢床の傍に抛りだした。ほう

だが、この煙草入れの持ち主は、誰であろうか？

夜がすっかり明け放れた。

戸外は大きな叫び声が出ている。誰か通行人が、お千の死体を見つけたのだらう。杜は外に出たものか、小屋の中に待っていたものかと思案に暮れたが、どうしても小屋の中にジツとして居られずになった。それで裏口の幕を押し開いて、集まつてきた朝起きの人たちと同じく、お千のブランコ死体の下に馳けつけた。

急報によつて警官の出張があり、杜は真先に警官の手に逮捕せられた。

警官が後から後へと何人もやってきた。背広服の検事や予審判事の姿も現れた。現場の写真が撮影されると、お千の死体は始めて下に下ろされた。

「死後十時間ぐらい経っていますネ」と裁判医が首を傾げながら云った「ですからまず昨夜の八時前後となりますネ」

杜は、さんざんばら係官に引摺りまわされた上で、警察署に連行されることとなった。

「ただ、正直に凡てを話して下さい。僕達がこうして君に詳しく聞くのも、結局君の無罪なる点をハッキリして置きたいためです」と、係の検事は穩かに云った。

杜はそれが手だと思わぬでもなかったけれど、適当に検事の温情に心服したような態度を示しながら、出来るだけ詳しい話をした。しかしマッチの函の中に収めた血痕のことだけは、とうとう云わなかった。なにしろそのマッチの函を某所に隠してしまったので、もしその隠し場所などを喋ったとなると、杜のやり方に不審をいだかれるは必定であり、それから更に面白くない嫌疑を募らせてはたまらないと思つたので、血痕のことだけは云わないこ

とにした。それは検察官のために、一つの貴重なる断罪資料を失うことになるけれども、ここに至っては、もうどうにも仕様がなかった。

「——前日に来たこの五十男は何という名前だつて」

と検事は鉛筆をなめなめ杜に聞いた。

「たしか麴町の殿様半次とか云っていました」

「ええつ、殿様半次だと、——」

と警官連は半次の仕業と知ると、云いあわせたように仰ぎょうてん天てんした。

「——つまりこの女の情夫である麴町の殿様半次が一番怪しいということになる。半次ならやりかねないだろう」

重大なるお尋ね者である半次は、天には勝てず、古い友達ふるのバ
ラックに潜伏しているところを捕えられた。とら

それから取調べが始まった。

半次の前には、例の口付くちつき煙草入れと、土間から拾い上げた吸
殻四個とが並べられた。

彼のアリバイは、彼の当初の声明を裏切つて、遂に立証すべき
何ものも見つからず、遂に彼は恐れ入ってしまった。

事件は次のように審理された。

すなわち半次は、当日お千をまた尋ねて、昔の如き情交を迫り、
遂に目的を達したことは、お千の死体解剖によって明白である。

しかれどもお千は、今後の情交を拒絶し、もし強しいてそれを云う

ようであれば、半次の旧悪の数々とともに、彼の居所をその筋へ密告するからと脅迫したところから、半次は今もこれまでなりと思ひ、お千をくびり殺したものである——というのである。

これに反して、杜のアリバイは確實であつた。なにしろその日はずっと会社に居り、そして会社の門を外に出たのが午後十時だといふから、お千の死に無関係であることが証明された。

半次はお千殺しを頑強に否認しつづけたが、遂に観念したものが、とうとうそれを白状してしまった。係官はホツと息をついた。そしてやがて、半次を公判に懸ける準備に急いだのだつた。

杜はずつと早く釈放せられて、思い出のバラツクに、只一人起き伏しする身とはなつた。

静夜^{せいや}、床のなかにひとり目覚めると、彼は自分の心臓がよく激しい動悸をうっているのを発見することがあつた。そういうときには、きつとお千の最期^{さいご}について何か追つ懸けられるような恐ろしい夢を見ていた。

或る夢では、杜自身が犯人であつて、お千を殺した顛末^{てんまつ}を検事の口から痛烈に論告されるところを夢見た。また或るときには、何者とも知れない覆面の人物が犯人となつていて、その疑問の犯人から彼が責め^せ誅^{さい}まれて苦しくてたまらないところを夢見たりした。前者の場合よりも、後者の一方の夢がずっと恐ろしかった。

恐ろしい夢から覚めた彼は、きまつて寢床のなかにいて、今度

は現実にお千殺しの顛末を考え直すのであった。——果して半次がお千を殺した真犯人であろうか！

敷島の吸殻といい、煙草入れといい、それからまたあの前日の会見の捨て台辞す ぜりふといい、半次の日常生活といい、十六貫もあろうというお千の身体を大木に吊り下げたといい、半次を真犯人と断定する材料は決して少くなかった。それにも拘かからず、杜はなんとなく半次が真犯人でないような気がしてならなかった。

(どうしてそんな風に思うんだろう?)

杜は自分の心の隅々を綿密に探してみるのであった。別にこれこれと思うものも見当たらないのだ。だがそのうちに、もしかするとこれかも知れないと思うことがあった。それは、あの事件の後

で、杜が現場に落ちていた血痕を拭^{ぬぐ}つて一つの証拠を湮^{いんめつ}滅し、それからまた毛布についていた血痕の部分^{はさみ}を鋏で切り取つてマツ千函のなかに収め、同じく証拠湮滅を図つたことである。その血痕が直接に犯人を指しているというのではないが、畜^{ただ}そのような証拠を隠滅した行動それ自体が杜には後悔され、そして予審が終結したのにも拘らず、その結末が彼だけには信じられないのであつた。それはたしかにこの世ながらの地獄の一つだと、杜は感じたことである。

あの血痕を、それから自身持参して検事局を訪ねようかと思わぬでもなかつたけれど、一日経ち二日経ち、彼は遂にそれを決行しなかつた。

それは事件があつてから、もう一ヶ月に垂なんんとする頃の出来ごとだった。

杜はバラックの中で、明るい電灯のもとに震災慰問袋の中に入つていた古雑誌を展ひろげて読み耽ふけっていた。そのとき表の方にあたつて、

「今晚は——」

という若い女の声を耳にして、ハツと愕おどろいた。事件以来、それは最初に彼に呼びかけた女の声であるかもしれない。

「だ、誰です。——」

彼は恐おそる恐おそる席を立って、表の戸を開いてみた。

「ああよかった。いらつしたのネ」

「ど、誰方？——」

杜にはそれが何人であるかは大おお凡よそ気がつかぬでもなかったが、ついそう聞きかえさずにはいられなかった。激しい興奮が、いまや彼の全身を駆けめぐり始めたからだ。

「あたしよオ。——ミチミ」

ああミチミだ。やっぱりミチミだった。ミチミが来た、ミチミ

が帰って来たのだ。震災の日に生き別れ、それから一度焼け落ちた吾妻橋の上で睨にらみ合つて別れ、それからずっとこの方かた彼女を見なかつた。とうとうミチミは彼の前に現れた。昔に変わらぬ純な、そして朗かなミチミであるように見えた。

「おおミチミ。——さあお上り」

その年はいつまでも真夏がつづいているように暑かつた。ミチミは何処で求めたものか彼女らしい気品の高い単衣ひとえを着、そしてその上に青い帯を締めていた。

「よく分つたネ。こんな所にいるということが——」

「ええ。——でも、新聞に貴郎あなたのことが出ていたわ。ほんとに今度は、お気の毒な目にお遭いになつたのネ」

「いや、やっぱり僕の行いがよくなかったんだ。魔がさしたんだネ。誰を怨むうらこともないよ」

杜は心の底から懺悔ざんげの気持になった。

「そうネ。世の中には、自分の考えどおりにならないことが沢山あるのネ。今のあたしもそうなのよ」

ミチミはそれを鼻にかかった甘ったるい声でいって、眼を下に俯ふせた。そこには単衣をとおして、香りの高いはち切れるような女の肉体が感ぜられる、丸々とした膝があつた。杜はムラムラと起る嫉妬の念を、どう隠すことも出来なかつた。

「もうわざとらしい云い訳のうけなんかしないでいいよ。君は正面きつてあの長髪の御主人の惚のろけ気を云つていいんだよ」

「まあ、——」

ミチミは張りのある大きな眼で杜を見据えた。

あなた

「貴郎はあたしのことを誤解しているのネ。きつと御自分のことを考えて、あたしの場合も恐らくそうだろうと邪推しているんですよ。そんな勝手な考え方はよしてよ。あたしムカムカしてきてよ」

「いやにむきになるじゃないか。むきにならざるを得ないわけがありますって、自分で語るようなものだよ。もうよせたら、そんなこと。僕は一向興味がないんだ」

「先生——」

たまりかねたかミチミは、いきなり中腰になって、杜の前に飛

びついてきた。彼は全体が一度にカーツと熱くなるのを覚えた。

「先生、あたしはもともとそんなに節操のない軽薄な女なんでしょう。いえいえそれは全く反対です。先生はそれをよく御存知だったじゃありませんか。先生がどんなことをされていても、あたしはそれに関係なく、いつも純潔なんです。魂を捧げた方に、身体をも将来をも捧げますと固く誓った筈です。それをどうしてムザムザあたしが破るとお考えなんです。あたし、ほんとに無念ですわ。無念も無念、死んでも死に切れませんわ。あたしが先生のために、どんな大きな艱かんなん難なんに耐えどんなに大きな犠牲を払ってきたか、先生はそれを御存知ないんです。しかし疑うことだけはよして下さい。少くともあたしの居る前では。——あたしはい

つでも先生の前に潔白を証明いたします。今でももし御望みならば——」

「おつと待ちたまえ。君はまるで、夢の中で演説しているように見えるよ。長髪の青年氏と同棲していて、なんの純潔ぞやといいたくなる。もつとも僕は一向そんなことを非難しているわけではないがネ」

「まあ、そ、それは、いくら先生のお言葉でも、あんまりですわ、あんまりですわ。——」

ミチミは子供のように声をあげて、その場に泣き伏した。

杜は、曾かつて知っていたミチミとは別の成熟した若い女が、彼の前で白い頸を見せ、肩を慄ふるわせて泣いているように思った。それ

はなんとではなく、彼の心に或る種の快感を与えるのであった。

ミチミは、泣き足りてか、やがて静かに身体を起した。両の袂を顔の前にあて、その上から腫ればはつたい瞼を開くような開かないようにして、杜の方を見た。

「——覚えてらっしゃい」

ミチミは、たった一言云つて、膝を立てて立ち上ろうとした。しかし彼女はヨロヨロとして畳の上に膝をついた。

「ウム、——」

そのとき杜は、不思議なものを見た。ミチミの白い脛すねの上から赤い糸のようなものがスーッと垂れ下つてきて、脛を伝わって、やがてスーッと蹠くるぶしのうしろに隠れてしまった。血、血だ！

見れば畳の上にも、ポツンと赤い血の滴りが滾こぼれているではないか。杜はドキンとした。

「おい、ミチミ待て——」

ミチミはそれが聞えぬらしく、外へ出てゆきかけたが、何を思ったか、また引返してきて、杜の前に突立った。そしてまるで別人のような態度で、恰あたかも命令するかのようにな、

「さあ、これからあたしと一緒に行くのよ。あたしのうちに行つて、そしてあたしの奪われているものを、貴郎あなたに手伝つてもらつて取返すのよ。そしてあたしは、どうしても貴郎から離れないよになるのよ。さあ行つてよ、早く——」

杜はミチミの意外な力に引張られて、やがて家を後にした。

ミチミは道々、杜にくどくどと説いた。

ミチミがどうしても有坂——長髪の青年のこと——から離れられないわけは、彼のためにミチミの所有になる或る重大なる秘密物品が有坂の手によつて保管されていることだ。それを取戻さない限り、有坂の許を離れるわけにはゆかない事情がある。有坂の手から、ぜひそれを取返さなければならぬが、その品物は彼女のバラックの屋根の下にある一つの壊れた井戸の中に、大きな石に結びつけて綱によつて垂らしてある。ミチミの手では、この重い石をどうしても引上げられないから、今夜杜に手伝つて貰いたい。——というのである。

杜は承知の旨を^{むね}_{こた}へた。

ミチミの住居は、隅田川の同じ東岸に属する向島すまいにあつた。そして同じく広々とした焼跡に立つバラックであつて、どつちを見渡しても真暗なところであつた。

ミチミはバラックの窓の灯を指して、彼を二十間ほど手前で待っているように云つた。そして彼女は、スタスタとバラックに近づき、やがて戸を開いて内側に姿は見えなくなった。杜はポケット

トの底を探つて一本の煙草を口に咥くわえた。

ミチミはなかなか出て来なかつた。

杜は、さつき道々で彼女の云つたことを考えていた。——有坂青年に奪われている彼女の秘密物品を取り返すのを手伝つて呉れ、それはバラックの中にある古井戸の中に、大きな石に結びつけて沈めてあるから、手伝つて綱を引張つて呉れ——というのだ。一体どんな秘密物品を彼女は有坂に奪われているのだろうか。ミチミが持つていそうな秘密物品とは、どんなものが有り得るだろうか。と、昔の生活をいろいろと思ひ浮べてみた。しかしどうも心あたりがなかつた。ラブレーターであろうか。日記帳であろうか。それとも或る種の誓詞せいしであろうか。写真の乾板かんばんでもであろうか。で

も以前にはおよそそんなものを、彼女が持っている様子はなかった。もしそんなものが有るとすれば、それは恐らく、震災後に来たものに違いない。杜は急に、それを見たくなくなってきて仕様がなかった。

そのとき、ジャングルから黒豹が足音を忍んでソツと獲物の方に近づいてくるように、ミチミが静かに静かに戸口から現れた。彼女は一本の長い綱を持っている。それは戸口の中まで続いているのであった。

「——あの人、今いい気持ちに眠っているのよ。目を覚まさないように気をつけてネ。そこであたしがお願いするのは、この綱よ。これをあたしが内側から合図をしたとき、綱が千切られるくらい

ウンと引張つて向うへ駆けだしてネ。四、五間も走ると、きつと綱が何かに引懸つてそれ以上伸びなくなるから、そこんところで、ジツと持つててネ。あたしが帰つてくるまで、離しちや駄目よ。

いいこと」

ミチミは杜の耳許みみもとで、声をひそめて説明した。彼の感能はそ
のとき発煙硝酸のようにムクムク動きはじめた。ミチミをどうし
ても自分のものにしなないと、自分の心臓が痙攣を起してしまふか
もしれないと思つた。

ミチミが、またバラツクの中にかえつてゆくと、杜は綱を両手
でソツと握つた。綱を握っていると、なんとなく変な気持になつ
てきた。この暗黒の焼野原の真ン中で、自分はいま何をしよう

しているのだろう。なんだか非常に恐ろしいことを手伝っているような気持がして、彼は思わずブルブルと身慄みふるいた。

途端に綱を握っている手に、ピーンと手応えがあつた。ミチミがバラツクの中で綱を引いて合図をしたのであつた。

「ウン、今だナ——」

彼は綱をグツと握りしめると、後を向いてトツトと駆けだした。大地に躓つまずいて倒れるかもしれないと思つたほど、渾身こんしんの力を籠こめてウウンと引張つた。

ドーンと鈍いそして力づよい手応えが両腕を痺しびれさせた。とうとう沢庵石が井戸から上つてきたのであろうか。彼は綱端を両手に掴み、身体を弓のように反そらせて、バラツクの中に潜む大きな

力に対抗していた。でもなんとという奇妙な手応えだろう。どうも沢庵石を引張りあげたにしては、いやに反動がありすぎた。なんだか沢庵石が生き物に化けて綱の端でピンピン跳ねまわっているようであった。

ミチミが杜の方に駆けだしてきたのは、それから十分ほど経つた後のことだった。

「もう大丈夫よ。その綱の端を、あなた貴郎の前にある切株に結んで頂戴な」

ミチミは、すっかりした調子で、それを命じた。

杜はミチミに手伝わせて、そのようにした。

「さあそれでいいわ。——ではバラックの中にあるあたしの必要

なものを片づけましょう。一緒に行つて、片づけてくれない」

「ウン、行つてもいいかしら」

「もう大丈夫よ。有坂は、もうなんにも邪魔をしないわよ」

杜はミチミの言葉を深く考えもせず、彼女について、恐る恐るバラツクの入口をくぐつた。バラツクの中には、暗い電灯が一つ天井から下つていた。彼は極めて自然に、自分がピンと引張つた綱の先を眼でもつて追つていった。その綱は上向きになつて、梁はりの方に伸びていた。その梁の向うに、彼は全然予期しなかつたものを見た。それは紛れもなく、宙にぶら下つた男の全身だつた。杜はそれが何者であるか、そして何をしているのかを知つた瞬間に、愕きのあまりヘタヘタと土間に膝をついた。

「ウム、これは有坂青年だ。これはどういいうわけだッ。——」

ミチミは、ジャンヌ・ダルクのように颯爽さつそうとして、杜の前に突立った。そして氷のように冷徹な声でいった。

「これがあたしの自由を奪っていたものよ。この有坂さんは、この前は今夜貴郎がやってくれたと同じようにお千さんの始末をするのを手伝ってくれたのよ。もちろん、すべての計画と命令とは、あたし一人がやったんだわ」

「人を殺してどうするんだ」

「そんなことはよく分っているじゃないの。あたしはただ貴郎が欲しいばかりよ。だからそれを邪魔する者を片づけたばかりなんだわ」

杜は大きくブルブルと身慄いした。

「——ああ僕は、この手でとうとう人を殺してしまったのだ。ああ、もつともつと前に気がつかないやならなかつたんだ。先刻さつきか、いやいや。もつと前だ。お千が殺された時か。いやいやもつともつと前だ。そうだ震災になる前に考えて決行しなきゃならなかつたんだ。ああもう遅い。とりかえしがつかない」

そういつて、杜はわれとわが頭を握り拳にぎこぶしでもってゴツンゴツンと殴なぐつた。その痛々しい響は、物云いたげな有坂かすいの下垂死体の前に、いつまでも続いていた。

杜はミチミを連れて、久方ぶりで郷里に帰った。今はもう誰に
憚はばかるところもなく、一軒の家を借り同棲することとなった。いや
憚るところもなくといつても、彼等二人は晴れて同棲を始めたわ
けではなく、俱ともに追わるる身の、やがて必然的に放れ離れになる
日を覚悟して、僅かに残る幾日かの生への執しゅうちやく着やくを能うるかぎ
り貪むさぼりつくしたいと考えたからだった。

その切迫した新生活の展開いくばくもならぬうちに、杜はミチ
ミについていろいろの愕くべき事実を知った。その一つは彼女が、

いつか差^{はじ}らいをもつて彼に告げたごとく、彼女がこのたび杜と同棲する以前に於ては、ミチミの身体が全く純潔を保たれていたという意外なる事実であつた。ミチミの信念と勝気は十二分に証明せられた。

もう一つは、彼女の犯行がいつも一定の条件のもとに突発したということだつた。それは彼女の生理的な周期的変調が犯行を刺戟するのであつた。杜はそれを彼女の口から聞いて、過去に於けるいろいろな事象を思い出して、なるほどと肯^{うなず}いたのであつた。お千殺しの現場に落ちていた血痕も、これを顕微鏡下に調べてみれば、そこに特徴ある粘膜の小片が発見されたに違いなかつたのである。さもなければ分析試験を俟^まつて多量のグリコーゲンを検

出すことができたであろう。いずれにしても、それは生理的な落しものであることが証明される筈であつた。ともあれ、そういう条件下の出来事だとすると、これはうまくゆけば、やがてミチミが法廷に裁かれても、死一等を減ぜられることになろうと思つた。それはこの際のせめてもの悦びよろこであつた。

しかし人間の世界を高き雲の上の国から見給う神の思おぼしめし召はどうかであらうか。神はミチミが法廷に送られる前に、天国へ召したもうた。

実はあれだけ立派な証拠を残して来た犯罪事件ではあつたが、震災直後の手配不備のせいであつたか、それから一月経つても、二月経つても、司直はミチミたちを安穩あんおんに放置しておいた。し

かし初冬が訪れると間もなくミチミは仮初の風邪から急性の肺炎に侵されるところとなり、それは一度快方に赴いて暫く杜を悦ばせた。けれども年が明けるとともにまた容態が悪化し、遂に陽春四月に入ると全く危篤の状態に陥った。ミチミが他界したのは四月十三日のことであつた。

折から桜花は故郷の山に野に爛漫と咲き乱れていた。どこからか懶い梵鐘の音が流れてくる花の夕暮、ミチミは杜に手を取られて、静かに呼吸をひきとつた。

杜はミチミの亡骸をただひとりで清めた、それから白いかたびらを着せてみたが、いかにも寒々として可哀想であつたので箆笥の引出を開いて、生前ミチミが好んでいた燃えるような緋ぢり

めんの長襦袢に着かえさせた。そして静かにミチミの亡骸を、寝棺かんのなかに入れてやったのであった。

ミチミの蠟細工のような白い面かおを見ると、杜ふとは不凶思ふといついて、彼女の鏡台を棺の脇はこに搬はこんできた。そして一世一代の腕をふるって、ミチミの死顔にお化粧をしてやった。

白蠟かおの面かおの上に、香りの高い白粉おしろいがのべられ、その上に淡紅とき色いろの粉白粉おしろいを、彼女の両頬つぼに円まぶたらな瞼まぶたの上に、しずかに摺すりこんだ。そして最後に、ミチミの愛用していたルージュをなめて、彼女のつつましやかな上下の唇に濃く塗りこんだ。

ミチミはいきいきと生きかえったように見えた。真赤な長襦袢と、死化粧かんばせうるわしい顔かんばせとが互に照り映えて、それは寝棺かんのなか

に横たわるとはいえ、まるで人形の花嫁のようであった。ミチミは寝棺のなかに入つて、これから旅立つ華やかなお嫁入りを悦ぶものの如く、口辺に薄笑うすえみさえ湛たえているのであった。

杜は惚れ惚れと、棺桶の花嫁をいつまでも飽かず眺めていた。

この静かな家の中の出来ごとを、村の人々がハツキリ知つたのは、次の日の昼下りのことであつた。杜は自ら梁はりの下に縊くびれていらた。

人々の騒ぎを他処よそにして、床の間の大きな花瓶に活けてあつた桜の花が、一ひら二ひら静かに下に散つた。

青空文庫情報

底本：「海野十三全集 第4巻 十八時の音楽浴」三二書房

1989（平成元）年7月15日第1版第1刷発行

初出：「ぷろふいる」

1937（昭和12）年1～3月

入力：tatsuki

校正：門田裕志

2009年12月8日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www>

W.aozora.gr.jp) で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランテイアの皆さんです。

棺桶の花嫁

海野十三

2020年 7月13日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>

※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。

<http://tokimi.sylphid.jp/>